

4 月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
4月号
No. 598

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カエルの目線

△表紙の花▽ 桜子

背の低い花のとり合わせの時には、自分の目線を地面すれにしたところを想像しながらいけてみると面白い。私達は普段、そんな目線で物を見ることは無い。だからこそ新たな発見があったりすると思うのだ。上から見ても見えないところが見えてくる。こんなところにこんな花が咲いている！。そんなわくわくするような気持ちで小さな花をいけてみよう。

春の温もりに誘われて伸びてきた^{ぜんまい}。この薔を主役にして母の株を足もとに加えると、小さな母の花も色づき始めた赤い実も、薔のクルクルもじつくり間近で楽しめる。カエルの目線でいけたいけはな。

花材 薔（薔科）

母（薔科）

花器 三角柱花瓶

鉢植を生かす

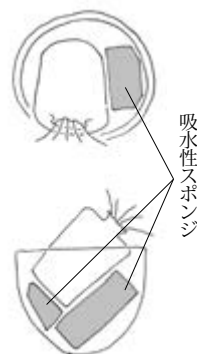
△2頁の花▽ 桜子

可愛い鉢植えを見つけたので買ってしまつた。この小さな白い花の名前は西洋雲間草。雪の下科の常緑多年草で北ヨーロッパの原産。花色は白のほかに赤とピンクもある。日本には雲間草が自生していて、北アルプスなどの高山で雲がたちこめるような中に咲くところから名づけられた。

西洋雲間草は切って小さくいけること



もできるが、鉢植のような華やかさはなくなる。鉢ごと黒いビニール袋で包み、底の深い花器にそのままいけてみる。左図のように吸水性スポンジを切って枕にすると安定した。とり合わせた椿と黒百合は鉢と花器の隙間に吸水性スポンジをはめこんで、そこに挿していけている。



焦茶色の花器の上で、白い小花が自然の表情を見せてくれた。

花材 西洋雲間草（雪の下科）

黒百合（百合科）

椿（椿科）

オーストラリアの豆豆

〈3頁の花〉 櫻子

アカシア（俗称ミモザ）のフワフワした黄色い花に橙色の小花が連なったコリゼマを合わせてみた。コリゼマはオーストラリアのユーカリの森に生える豆科の常緑低木で、作例では鉢植から切っている。ミモザもオーストラリア原産で豆科の常緑高木。同郷の豆科どうしのとり合わせ。

花材 銀葉アカシア（豆科）

コリゼマ（豆科）

アンスリウム（罂粟科）

花器 細口陶角敏



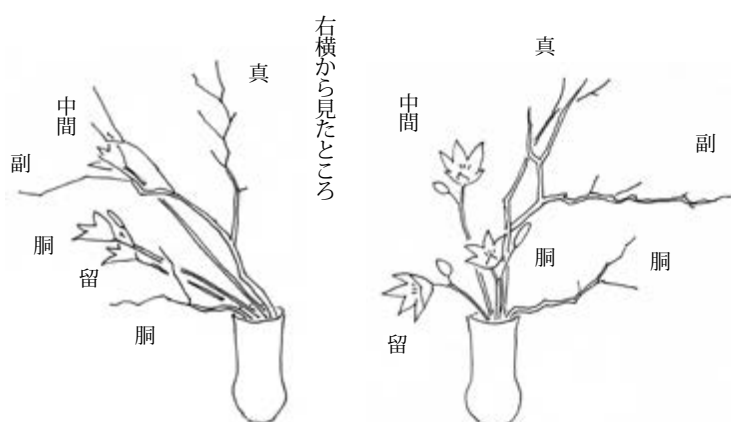
上り広がる枝・添って出る花

主材 土佐水木（満作科）

副材 透かし百合（百合科）

稽古を積んでいけばなは技術が身についてきたら、枝の姿に合わせて自然体でいけてみるといい。枝が前へ出れば花はうしろへ。枝が横へ広がれば花は中央に、というように、花型を自在に工夫することで、さらに一歩前へ進むことが出来る。

投入斜体副主型（逆勝手・控省略）





③ 透かし百合は前から順にいけてゆく。まずは右前の胴の位置に。



① 土佐水木の花が自然にぶらさがって見えるように枝を花器に入れて手を離してみる。分かれ枝が逆勝手の真と副の位置におさまった。



④ 土佐水木の枝に添わせるように透かし百合をさしたところ（中間の位置）。全体のバランスを見て3本目の透かし百合を加え、敷物に飾る。（4頁の花）



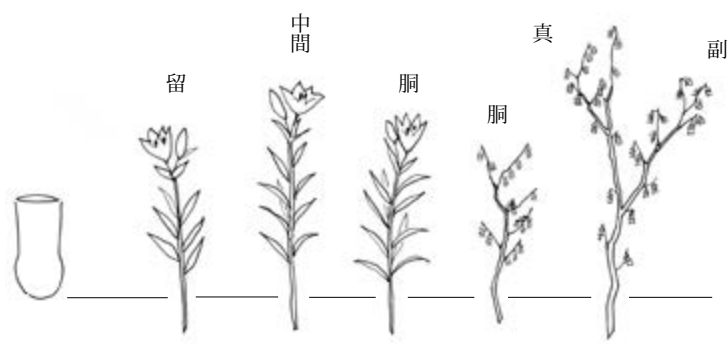
② あとで百合を3本入れるので、中央を大きく空けておき、別の枝を低く右へ出した。（胴の位置）

今回の投入では真の枝のおさまりが比較的うしろよりであったので、百合は3本とも前方へ出している。控を省略しているが、真の水際から出た小枝が奥行きを補ってくれている。

花型にしばらくられるよりも、土佐水

木の花を愛でる気持ち大切にしてい

る。



各役枝の長さ

花器の水際

NHK「趣味D.O.楽」 「ハンサムウーマン」 桑原 櫻子

3月12日放送の「趣味D.O.楽」

に櫻子副家元が出演。花と料理によつて、自然を見つめ季節を感じながら豊かな心を育む様子が紹介されました。



JR京の冬の旅 センス・ザ・ミヤビ

キャンペーンポスターに櫻子副家元が協力。約3ヶ月間、全国のJR駅及び車内に掲示された。



「日本人の忘れもの」 京都、こころここに」

京都新聞社 編

大震災後の二〇一一年七月から一年間、京都新聞に連載された一〇二人のエッセー集。

櫻子副家元もリレーエッセーと記念フォーラムで参加しています。

これからの日本をどうしてゆくかということを考える上で、経済成長の代償として日本人が忘れてしまったものは何だったのかを考える作業は、その手がかりになる。定価本体一八〇〇円。



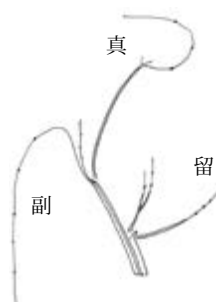
連翹 ^ 8頁の花^ 仙溪

花型 草型 副流し
花器 陶鉢

この連翹の生花は剣山を使って
いる。いけたあと、剣山がかくれるま
で砂利を入れておくと水際も見せ場
になる。

長く伸びた細枝があったので、そ
れを生かす工夫をして連翹らしさを
出してみた。真の枝先のカーブも撓
めてつくっている。

連翹は木犀科の落葉低木。中国、
朝鮮半島の原産。



洋花と青麦

^ 9頁上の花^ 仙溪

大麦の若い花穂はいかにも春のの
どかな感じがする。青麦の名前で早
春からよくいけるが、いけたあとだ
んだんと花穂が上にのびてゆく。と
り合わせには明るい色彩の洋花がよ
く似合う。無季節な感じの花も、青
麦と一緒にいけると、春の表情にな
るのが面白い。

花材 青麦 (稲科)
エビデンドラム (蘭科)
花器 橙色釉陶花器



△ 9 頁 下 の 花 ▽

解 説 は 10 頁



君子蘭

△9頁下の花▽

仙溪

君子蘭は南アフリカ原産の彼唇花科クリビア属の多年草。明治時代に日本にやってきた。肉厚の長い葉が左右に広がり、中央に平たい花茎を伸ばして複数の花が咲く。王様のような威厳を感じての命名なのだろう。とり合わせにも気を遣う。君子蘭の個性を潰さないようなお相手を考える。作例では縞斑の入った玉羊歯と都忘れを選び、君子蘭が目立つように低く広げた。

花材 君子蘭（彼唇花科）

斑入り玉羊歯（玉羊歯科）
都忘れ（菊科）

外国の香り

△10頁の花▽

仙溪

この白い小さな花は白花金雀児で、近づくとき強い香りがある。どんな香りを表現したいのかが思い当たらない。自分の中では外国の香水の香りというところ。この金雀児をいけたあとで蜜柑を食べて「この蜜柑は新品種？」と勘違いするくらい手に香りが残っていた。剣山に立てると枝がふわりと広がってくれる。五色の大輪のガーベラを低く並べて白い小花を目立たせている。

実はこの金雀児、ほんのり緑色がかっている。花屋によると色を吸わせて緑色にしているらしい。しかも



イタリアからの輸入だそうだ。オシヤレにこだわるイタリア人ならわざわざ緑色を吸わせるのも理由があるのかもしれないが、白い花は白いままでもいいじゃないかと思ったりもする。でもそんな批判をしたところで、「楽しければいいじゃないか」と返されそうだ。

花材 白花金雀児（豆科）

ガーベラ（菊科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 空色釉花器

波紋の器

△11頁の花▽

櫻子

この青白磁は宮永東山氏がつくられた器で、どつしりとした六角柱をしていて大きな丸い口があいている。器の表面には波線が斜めに重なる。波の模様のように、椿をいけると、深山の水辺にいるような澄んだ空気を感ずる。

器の装飾にもいろいろあるが、宮永氏がつくる器のように、自然との接点を感じられる器には花がしっくりと合うように思う。きっと自然を敬う心がいけばなと共通しているのだろう。大好きな器。

花材 喇叭水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

花器 六角柱青白磁（宮永東山作）



スカビオーサとアカシア

櫻子

花屋で見つけたら必ず買いたい花がある。スカビオーサもそのひとつ。複雑な花びらのかたち、薄紫から暗紫色、赤紫やピンクまでの色の変化も綺麗で、頼りなげに咲く姿も良い。しかし口持ちもする。松虫草の仲間なので、優しい趣を残している。日本では松虫が鳴く頃に咲くので松虫草と呼ばれているが、スカビオーサは疥癬（かたがね）という意味で皮膚病に効く薬草として使われていた。ヨーロッパ西部に自生する花である。

最近春先にも出回るようになった。本来は初夏から秋に咲く花なのに。その上黄葉のアカシア！。初秋に飾れば、素敵な取り合わせなのに。花の魅力に負けて買ってしまった事をお許しください。

花材 アカシアの黄葉（豆科）

スカビオーサ（松虫草科）

花器 ブルーガラス深鉢

「仙齋彩歳」

父がテキストに連載していただきました随筆「仙齋彩歳」と父のいけばなを一冊の本にまとめました。ご希望の方はお早めに家元事務局へお尋ね下さい。

定価 五千元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
4 月号
No.610

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





花は自分そのもの

△表紙の花▽ 櫻子

「いけた花は自分そのもの」。私はいつもそう
思って花をいけている。

そんなふうに思えば、いけたあとも水をかえ、
いけ直し、短くなっても最後まで世話をするよ
うになる。花に対する敬意と愛情を大切にした
い。

客観的に見ても、花を選び器を選んでいけた
花には、いけた人の好みや内面が表れる。皆さ
んにも自分の好きな色の組み合わせみたいなの
があるだろう。ご自分で花を買ってつけた花
は貴方そのものだ。

表紙の青麦とアネモネの盛花も、赤色のクロ
トンを選んだ時点で、アネモネは赤色だけにし
て器は白がいいなと直感した。赤い花と葉から
伸びる青麦の柔らかな緑が目にも優しい。自分
にこんな雰囲気があったのかと驚いたが、これも
また私の花なんだと愛着が湧いてくる。

花材 青麦（稲科） アネモネ（金鳳花科）

クロトン（燈台草科）

花器 帽子型陶水盤（ドイツ製）

木製の器

△2頁の花▽ 櫻子

生活用具として作られた民芸品も花器として
使うと花を引き立ててくれて、又郷土的な面白
さも加えてくれる。祖父が何度も花生けに使っ
ていた中に韓国製の本鉢があった。

米を選別する器で、側面に段々の刻みこみが
あって、この器に米を入れ、振りながら選別す
る器具で、農具のうちのひとつである。

材質は松の木のような。長い間仕舞いこまれ



ていた。古くて素朴すぎるので、両親は使わなかったんだろうか。私は思い出の器として、又使つていきたいと思う。

陶の水盤を入れて剣山を使い、ミモザアカシアとチュウリップ、スイートピーをいけた。畑で育った健康的な花なら調和すると思う。

たっぷりとした容器なので、大きく派手に咲く花も受けとめてくれる。パロット咲き（オウム咲き）のチュウリップもミモザアカシアも軸が太く、長い間きれいに咲き続けてくれた。

花材 ミモザアカシア（豆科）

チュウリップ（百合科）

スイートピー（豆科）

花器 木製鉢（韓国製）

桜 アイリス 椿

△3頁の花▽ 仙溪

父が「燦陽会」と名づけた研究会がある。月一回、岡山の先生方が研鑽のため家元へ来られて二作稽古して帰られる。毎回、花フジが特別に花材を仕入れてくれる。

作例の桜とアイリスの投入は2月下旬の燦陽会の見本にいた花で、伸びやかな桜の枝を前方へ張り出して、その後ろに2色のアイリスをのぞかせ、椿で口元を引き締めている。椿は深紅小輪の出雲大社数椿で、父が好きたった椿だ。白花のアイリスが満開前の桜の花色を助けてくれている。

アイリス（ダッチアイリス）はオランダで作られた花だが、日本の桜や中国原産の梅や桃とも相性がいい。薔薇科の花木と菖蒲科の花の組み合わせで色んなバリエーションが考えられる。

花材 桜（薔薇科） アイリス（菖蒲科）

出雲大社数椿（椿科）

花器 赤銅色陶花器



除真のきしん 白梅の立花

仙溪

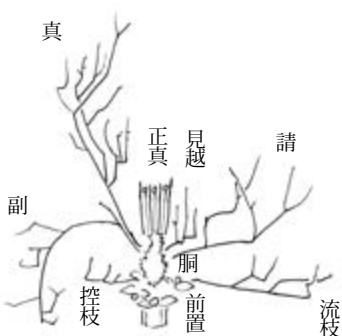
花型 行の花形

花器 耳付青緑釉コンポート

日本いけばな懇話会「梅の花会」に出品した立花。会期中残念ながら花は咲かなかったが、その後家で咲き、長い間甘い香りを楽しめた。

苔のまわった老梅で幹はこつこつとしている。梅は撓めがきくはずなのだが、最初に撓めた枝は簡単に分離してしまった。あまりのショックに呆然とする。気を取り直して作戦変更。自然の分かれ枝をそのまま使うことにした。元々大きな1本の枝から7つの役枝を作っている。

花会では様々な流派の先生方の梅のいけばなを拝見でき、とても勉強になった。他流に引けを取らない花材を提供してくれた花屋の気概に、なんとか応えなくては。技量不足を感じつつ、老梅に敬意と感謝を。





流枝会立花研究発表会

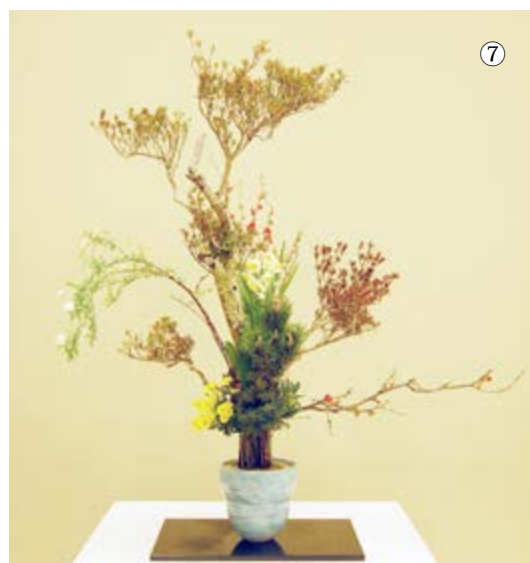
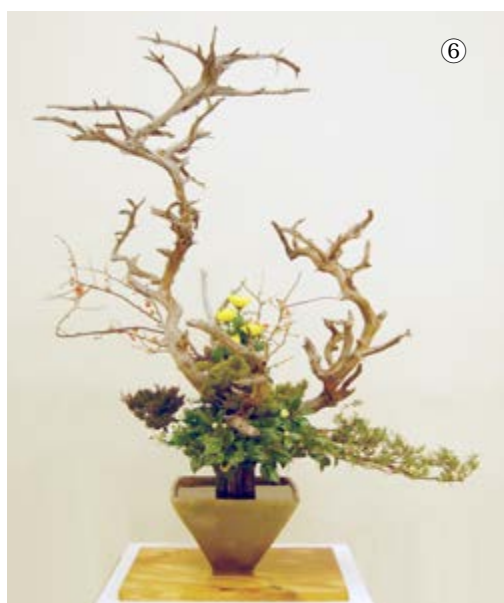
桑原専慶流華老の上野淳泉先生が指導する立花研究会「流枝会」の発表会に、家元を含む二十作の立花が立てられたのでここで紹介します。

大作のために器を作るところから始めた人、この日のために松を育てていた人、山を巡ってイメージを膨らませた人、それぞれに思いのこもった立花は見応えがあった。

桑原仙溪 (写真①)

花材 苔梅 椿 水仙 葉蘭











小手毬 チューリップ

△9頁の花▽

仙溪

花型 生花 株分け

花器 飴色陶水盤



小手毬 チューリップ

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花器 飴色陶水盤

小手毬の枝がつくる曲線には独特の美しさがある。白い手毬が跳ねてくるような動き。前方へ垂らすとまるで白い花の滝だ。

そんな小手毬は生花でいけるとなかなか難しい。あまり撓めがきかないので枝振り次第である。大きめの水盤に赤いチューリップと株分けにした。小手毬の分かれ枝は互いに絡めたりしながらできるだけ生かすようにしている。

花の気品

△10頁の花▽ 櫻子

スカビオサ（松虫草科）にはいろんな色がある。私が選んだのはワインレッドのスカビオサ。静かに人を惹きつける魅力がある。なんて綺麗な花なんだろう。風格と気品も感じられる。とり合わせには同系色の大輪の薔薇（薔薇科）とライラック（木犀科）を選び、淡いブルーと白のベネチアン・レース・グラスにいった。薔薇もライラックも思い切って短くいけ、スカビオサを主役にしていく。気品のある花をいける場合は、それに見合う品格の高い器を選びたい。

花器 ベネチアン・レース・グラス



白と黒の器

△11頁の花▽

仙溪

今月号には白と黒の器が3つ使われているが、3作とも赤い花をいけている。白い面の多い器と黒い面の多い器。無意識のうちに花に合う器をそれぞれに選んでいるようだ。

作例のシンビジウム（蘭科）はかなり重たいので安定のいい器でないとひっくりかえる。花の茎に丈夫な添え木を括り付け、器の底に剣山を置いていけている。アンスリウム（里芋科）の赤黒い花と茶色い葉を合わせたのが、花器の網目模様が花の重みを和らげてくれた。

花器 白黒花器（竹内眞三郎作）



出合い花（7） 仙溪

ガイミアリリー

アネモネ

去年9月号でいけたガイミアリリーが咲いたあと捨てずにいたのだが、乾燥してもなお強さが失われていないので、出合い花に使うことにした。朽ちた植物の横で新たな命を咲かせる花。そんなイメージでアネモネを一輪出合させた。ガイミアリリーの枯れ花は花器に立てた支柱に固定している。アネモネは鉢植から花と葉を切っていけている。

花材 ガイミアリリー（竜舌蘭科）

アネモネ（金鳳花科）

花器 掻き落とし陶花瓶

レモンちゃん

すっかり家中を探検しつくしたレモンちゃん。つくばいの水の音を聞きながら庭を眺めるの図。



【追伸】先月号の出合い花で使った赤と青の酒器は森野彰人作。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
4 月号
No.622

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





貝母^{ばいも} △表紙の花▽ 櫻子

貝母は漢名で、中国原産の多年草。球根が漢方薬にされる。和名ではアミガユリとも呼ばれ、花の内側に網状の模様がある。球根は二枚貝のような形をしている。

父の文章といけばなを纏めた「仙齋彩歳」には初夏にいけられた貝母の実と仙翁、鳴子百合（野生種）の投入がおさまっている（71頁）。6枚のプロペラのような実の面白さと、繊細な葉の枯れ色は、いかにも父好みの不思議な美しさがある。

仙翁は撫子科に属している。記憶の中から父の花が作用したのか分らないが、春の貝母には撫子と鳴子百合を選んでいた。父は白黒の陶花瓶にいていたが、私は軽やかな漆器にいて剣山を苔で隠してみた。漆器に花をいけると、特別な感じがする。上品な金彩の花模様、底面の朱色が優しさを添えてくれる。

花材 貝母（百合科）

撫子（撫子科）

鳴子百合（百合科）

花器 金彩高台漆器

ウロコ文様の花瓶

△2頁の花▽ 仙溪

使いにくい花器というのがある。でもとり合わせによっては独特の雰囲気を出してくれる花器。この鱗文様の花瓶もその一つで、高さが44センチ。



もある。

家に飾っていたシンピジウムの鉢植。長く伸びた葉は光沢があり魅力的だ。思い切って花3本と葉10枚を切りとり、グロリオサを合わせて鱗文様の花瓶にいけてみた。

花器の派手さに対して、花の強さとシンピジウムの葉の広がり、ほどよくバランスをとってくれた。

花材 シンピジウム（蘭科）

グロリオサ（百合科）

花器 鱗文様陶花瓶

ガイラルディア

△3頁の花▽ 櫻子

花屋で「これはルドベキア？」と聞くと「それはガイラルディアです」と教えてくれた。どちらも北アメリカ原産の初夏から秋まで咲き続ける多年草。ルドベキアはスウェーデン人の、ガイラルディアはフランス人の名前に由来する。明治時代に渡来している。

品種により天人菊、おてんばにぞく、大天人菊という和名がつけられている。花卉の色が先端で切り替わる不思議な花だ。

はじめていける花なので、相手の選択に迷ったけれど、同じ色が虹のように入るアイリスを選んで、白黒の器に入けると、優しい暖かみを感じさせてくれる花になった。

花材 アイリス（菖蒲科）

ガイラルディア（菊科）

花器 印花文陶花器（近藤豊作）



檀香梅

仙溪

春の花木の中で、枝を切った時に仄かに良い香りがするものがある。辛夷などの木蓮科の仲間と、青文字などの楠科の仲間がそうだ。楠科の黒文字を削って、和菓子を食べるとききの楊枝に使われるのも、材に香りがあるためだ。

檀香梅も楠科・黒文字属の小高木で、木に香りがすることから、ビヤクダンの漢名である檀香の字があてられている。

関東以西の暖地の山地に分布し、3月下旬から4月に葉の出る前に開花するので、山の中でよく目立つ。鮎色の花器に檀香梅をいけ、鮮やかな赤椿で水際をひきしめ、さて花を何にしようか。

早春の和の草花は、落ち葉の間から顔を出す小さな花がほとんどで、背の高い草花は限られている。貝母や黒百合は、芍薬などが出るまでの間の貴重な和花だ。

そんな思いを察してか、近年、黒百合の切り花が出回るようになってきた。おそらく京都だからということもあるかもしれないが、有難いことと感謝している。

花材 檀香梅(楠科)

椿(椿科)

黒百合(百合科)

花器 陶扁壺(林平八郎作)

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑪

立花秘傳抄 五 (つづき)

除心真の花形立ようの事

除真の真の花形と云うは、心のゆがみたる計

りにて、大枝の出し所、さのみ直心立と替わる事なし。図にしるしてここに略す。先ず、心を立て、その次に正心を立て、副を付け、見越、請、流枝、胴、前置、控枝と、次第に指すべし。行草の花形に至りては前後有り。

(除心真の花形図はテキスト 613号 6頁参照)

除心行の花形立様の事

左流枝の立様と云うは、心の梢、請の方へ行き過ぎたる時は、副の方かるきにより、その時は左の方へ流枝を付けかえ、心と張り合いますなり。又心に草などのかるき物を立て、請にお



左流枝

第十八図

立花 松除真

除心の内行の花形 左流枝 筑摩九郎右衛門

松 晒 要 柏 杜若 百合 栢植

榎木 野春菊 著我



流枝持立

第十図

立花 松除真

除心の内行の花形 流枝持立 富春軒

松 苔 百合 仙翁花 著我 木槿

栢植 嫩 小羊齒 桔梗

もき物を立てる時も、左へ流枝を取りて、請と張り合わせて、軽重なきように立てるなり。

いするなり。但し心より流枝へのうつり、心得あり。

あしらい口伝有り。

流枝持の立様と云うは、心の梢、瓶にのせず、副のかたをおもくなし、請にかかるき物を立て、^さ扱流枝は長く、おもき物を用いて、心と張り合

中流枝立と云うは、請の出所高く、流枝との間遠き時は中より流すなり。又心の除、副の出所、控枝のふりによりて、中よりもながすなり。

請流枝立は、心しだれ物か、又は心の枝、請の上へさがり、請を高く出す事ならざる時は、請をひくく指し、その下枝を長く出して、流枝をかねるなり。されば一本を以て、請と流枝を



中流枝立

第十八図

立花 萱草除真

除心の内行の花形 中流枝立 寺田清左衛門

萱草 苔 松 桔梗 樺木 小菊

紫苑 著我 要



請流枝立

第十四図

立花 梅除真

除心の内行の花形 請流枝立 西村松庵

梅 苔 檜 水仙 千両 伊吹 樺木

枇杷 嫩

もたするゆえ、請流枝立と名づく。あしらいに口伝。

り副を付けるなり。あしらい口伝。

内副立と云うは、副の付くべき所に枝有り、或いは自然と副を持ちたる心有り、或いはみき異曲に狂いて、副のつかざる心には、心の内よ

請あがり立と云うは、心の除ひくく、水ぎわより五六寸上にてのけたる時は、請にはしだれたる物を用いて、正心のもとより出すべし。柳薄花つる、連翹のたぐいなり。あしらい口伝。

請正心立と云うは、心水ぎわより除たる時は、請あがりとして竹を立て、笹にて請をもたせ、竹にて正心をあしらう故、請正心立と名づく。しかれども、請あしらい有り、正心あしらい有るべし。笹のしだれながき時は、流枝に心得有り。



内副立

第十二図

立花 松除真

除心の内行の花形 内副立 中野小左衛門

松 菊 小菊 梅擬 晒 榎木 嫩

沢枯梗

水際除

第九図

立花 松除真

除心の内行の花形 水際除・請上り立 (請正心立)

中野五郎左衛門

松 梅 竹 水仙 柘植 ひさかき 榎木 枇杷

出逢い花（18） 仙溪

プロテアアイビー
薔薇

プロテアといえば、キング・プロテアのように、大きくて重量のある花をイメージするが、作例のような華奢な仲間もあったのだ。花屋ではプロテア・アイビーと呼ばれている。

プロテアの名前はギリシャ神話の神プロテウスからつけられている。変身する能力をもつ海神だが、南アフリカから熱帯アフリカに百十五種類のプロテアの仲間が分布しているとのことなので、このような小型種があっても不思議ではない。

花弁に見える薄紅色の総苞片には白い毛がはえていて、なんとも優し

い感じである。この優しさを更に膨らませるような花は、と考えて深紅の薔薇を出逢わせることにした。

先日、相田みつをさんの特集したテレビ番組で、

「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなあ」という言葉があった。私達が花をとり合わせるのには、客観的には「出合

い」だけれど、花にとってはどうか、いけた花とその花を見る人との関係はどうかなどと考えると、「出逢い」の字を使うのがいいのではないかと思う。

常日頃、温かな愛を感じるいけばなでありたいと願っている。愛情をもって大切にいくと、花はそれにくたえてくれる。あらたな出逢いを。



小作



京の冬の旅協賛
京都名流いけばな展

河津桜の生花

△11頁の花▽ 仙溪

2月中旬から3月中旬にかけて、一足早く春爛漫の桜花を楽しむことができるのが河津桜だ。もともと伊豆半島の河津に咲いていた早咲き種だが、今年は各地で咲いた話を聞いた。染井吉野の先発隊みたいなボジションだろうか。

はじめて生花にいがけたが、枝は折れやすい。切り枝の場合、自然開花よりも花色は薄くなる。

③



大日如来さまに花を

仙溪

京都東山花灯路に紫木蓮の生花をいけた。場所は清水寺の参道にある眞福寺で、通りに面した大日堂では、大日如来座像を拜むことが出来る。この如来様は岩手県陸前高田の松でできている。7万本以上あった松原が津波で消失し、1本だけ残ったあの場所だ。沖へ流された内の700本が岸にもどったそうだが、鎮魂と復興の願いが込められて、大日如来像となった。

いけ込みは偶然にも東日本大震災から4年目の3月11日。被災地への思いを込めて、お祈りをさせて頂いた。



華道人口

仙溪

ここ数年、いけばな人口が減ってきた、という話をよくするようになった。その原因の一番目には、いけばなに魅力を感じられなくなってきたことが考えられる。

多くの人は日々の暮らしの中で、花がいけられているのをどれだけ目にしているだろう。家に花を飾る場所が無いともよく耳にする。花をいけない家庭で暮らしている人は、いったいどこでいけばなに触れられるだろう。

今でも質の高い料理屋には気の利いた花がいけられているし、オフィスのエントランスに花がいけられているところも無くはない。かなり減ってはきたけれど、店舗のウインドーでいつも気になる花がいけられているところもあるにはある。

それでもそんな花に足を止める人は希なようだ。みんな心に余裕がなくなってきたのだろうか。いけばなに魅力を感じられなくなってきたのは、魅力あるいけばなが少なくなっているのかもしれないが、それよりも魅力を感じる余裕がなくなってきたのではないか。

科学技術の進歩と共に、人の暮らしもせわしなくなってきた。便利なものがつくられると、時間をかけてじっくりつくることがなくなり、手塩にかけてとか、丹精こめてとかいう価値観が忘れられようとしている。しかし一方ではこれではいけないと思う人も増えつつあるように思う。

さて、華道人口を増やすにはどうすればいいだろう。自分自身がいけばなに興味をもちはじめた時の事を思い出してみる。ウインドーの一輪挿しに目がいくようになったのは、いけばなを見る目が変わったのは、父がいけた花を見て「こんないいけられたらいいな」と思った時からだった。

そう考えると、いけばな復興のきっかけは、人といけばなの「出逢い」が鍵になると云えないだろうか。花道人ひとりひとりが、周囲の人にその出逢いを提供すればいい。肝心なのはその出逢いが心のこもったものであること。一番はやはり誰かにいけばなを教える、あげるのがいい。職場に花をいけるとか、最新のツールを駆使して花の写真を多くの人に見てもらおう、なんてこともありだ。

ここでもやはり「感動が人間を動かし、出逢いが人間を変えてゆくんだなあ」である。

ネリネ三色

△12頁の花▽ 櫻子

ネリネの赤、白、ピンクは好きな配色だが、それぞれの分量によって印象が違ってくる。雪柳が加わることで、強い赤色が可愛く感じられる。ポトスの緑の濃淡も気に入っている。

花材 ネリネ三色（彼岸花科）

雪柳（薔薇科）

ポトス・ライム（里芋科）

花器 赤色ガラス鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
4 月号
No. 634

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出逢い花（28）

△表紙の花▽

仙溪

木蓮（木蓮科）

鈴蘭（百合科）

とある美術館のミュージアムショップにあった小鉢？。「出逢い花」に使おうと買い求めているので、その器に似合う花を花屋で探すことになった。

この木蓮の高さは29cm。大きな枝の脇枝を切ってもらったものだ。鈴蘭は12cmととても小さく、根付きで売られていた。

器の水玉模様と鈴蘭の可愛らしさ、木蓮の色と動きが一体となっておとぎ話のような花になった。

花器 陶茶盤（山口由次作）

エピデンドラム

△2頁の花▽ 櫻子

花材 エピデンドラム4色（蘭科）

スイトピー2色（豆科）

たましたつるしだ（蔓羊歯科）

花器 粉引陶水盤（伊藤典哲作）

色鮮やかなエピデンドラムを伸びやかに出して、スイトピーは水際近くに前方へ集めるようにいけている。広がるものと集まるもの。この対比がいけばなに躍動感を与える。ピンクの濃淡と紫の濃淡。そこに



黄色を効かせて。淡い春の花色で絵を描くようにいけた。

横から見た奥行き



キンクサリ

△3頁の花▽

櫻子

花材 金鎖きんくさり(豆科)

ギガンチウム(百合科)

花器 ブルーガラス花瓶

(ヨーラン・ヴァルフ作)

大好きな花の一つ、キンクサリ。ヨーロッパ中南部原産で藤に似た黄色い花が房状に垂れ下がる。寒冷地ではかなり大きく育つそうだ。安定のいいガラス花瓶に挿して紺色のバックに置くと、黄色い花が鮮やかに浮かび上がった。

キンクサリには十分な葉がついていたので、相手には大きな紫色の玉のように咲くギガンチウムを2本選んだ。反対色の紫色が黄色をさらに印象的にしてくれた。



枝の姿に添わせる

主材 小手毬こでまり（薔薇科）

副材 薔薇2種（薔薇科）

花器 陶花瓶

今年は奈良のお水取りが終わる頃、白木蓮、山茱萸、雪柳の花が一齐に咲き始めた。小手毬はそれらに少し遅れて咲き始める。

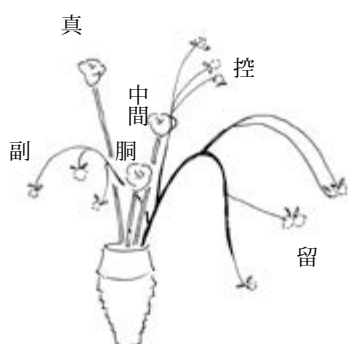
小手毬は中国原産の落葉低木。江戸時代のはじめには庭木などに利用されており、「立華時勢粧」にも名前が見られる。ちなみに雪柳も小米花の名前で書かれている。

手毬のように集まって咲く花が枝垂れる姿は独特の風情がある。その特徴を生かした花形を心がけた。

- ・ 上下に枝が分かれている時は二つに分けて使う。
- ・ 上方に枝が集まっている時はそのまま使う。
- ・ そのまま使うが、一部の枝を切って挿しなおす。

以上のような3通りのいけ方が考えられる。枝の姿にあわせていけ、添える花を臨機応変に挿し加えていく。

投入垂体留主型





③ 中間の位置に薔薇を加えたところ。小手毬の枝に添わせて入れている。枝と枝の間に薔薇の葉を注意深く広げてゆく。最後に真に薔薇を加える。(4頁の花)



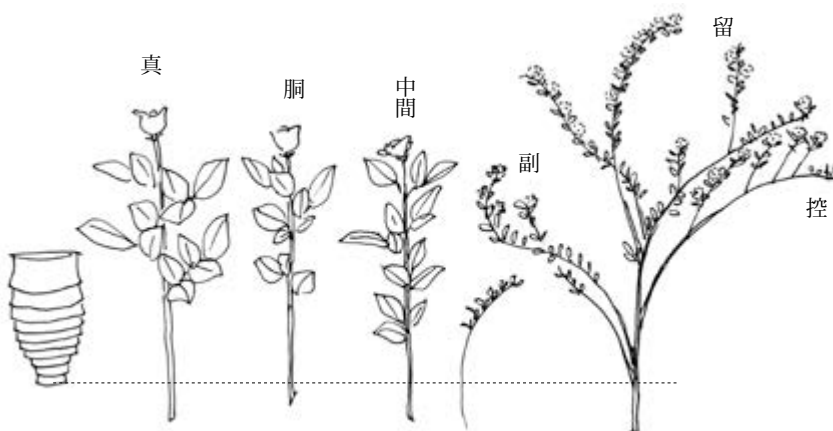
① まず主材の小手毬を自然な姿に持ってみて、そのまま使うか、切り分けるかを考える。作例では三方に広がる姿をそのまま生かすことに決め、留に主枝を出した。



④ 右横から見た奥行き。



② 胴の位置に薔薇を挿したところ。薔薇は充分水揚げをしておき、葉の綺麗なものを前方に使うようにするといい。



それぞれの長さ。主材の長さは、花器の幅と高さを足した長さの1.5〜2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立華時勢粧を読む ②②

こままで巻一、巻七、巻八の記述を紹介してきた。巻二、巻三は絵図のみなので、残る巻四〜六にあたる「立花秘傳抄一〜三」に書かれた花材解説について紹介してゆく。

立花秘傳抄 一

常磐木之部

木

説文に曰く、木は冒なり、地を冒して生ず。以て上は出、下はその根を象る。又曰く、木の性上^{しやう}の枝左右へはびこること一丈なれば、下の根も又土中にはびこること一丈。これ故に文字に書く時も上下同じくはびこるかたちなり。



枝

音は支、則ち四支なり。誠に人の手足あるが如くなり。柯は大枝を云い、朶・條は小枝なり。日本記には末をえたと云えり。



気条

唐詩に見る。

株

土の中に入るを根と云い、土の上を株と云う。砂物にこれを用いる。



葉

纂要曰く、切つて又生ずるをひこばえと云い、俗に云うわかばえなり。

葉

字彙に云う、奕葉また累葉などと続く字なり。皆世を重ねる心なり。また上艸に、下木にして、中に世の字をもつは、草木の葉が春は生じて冬落ち、或いは枯れてまた生ず。累年止むことなし。その理、世の春秋を重ねるに同じ。和訓に云う、葉は齒なり。人の歯有るがごとし。草木初めて生ずるに二葉を生じ、それよりまた気を出して枝葉花となるなり。



説文Ⅱ説文解字。後漢の許慎による漢字の字書。

艸Ⅱ草木の芽生え。

四支Ⅱ四肢。

纂要Ⅱ要点を抜き書きした書物。

字彙Ⅱ中国の漢字辞典。

光琳の「燕子花図」と富春軒

京都美風シンポジウム 琳派紀行⑥

3月1日 烏丸京都ホテル

パネラー…近藤高弘 重森三果 桑原樓子

京都商工会議所主催の「琳派^{りんぱ}」をテーマにしたシンポジウムに櫻子副家元がパネラーで参加させていただいたので、その折に副家元が話したことについて紹介したい。

・光琳と仙溪の接点

「立華時勢粧」が出版された貞享5年（元禄元年 1688年）当時、尾形光琳^{おがたこうりん}は30才。おそらく立華時勢粧のことを知っていただろうし、西本願寺の立花師である仙溪の立花を見ることもあったと思う。光琳が絵を描くよ

うになるのは40才以降のことだが、初期の代表作「燕子花^{かきつばた}図屏風」の着想には、杜若^{かきつばた}だけで立てる「杜若一色立花」に何らかの影響を受けているのでは。光琳の燕子花図屏風はもと西本願寺に納められたものだそうで、光琳と流祖・富春軒仙溪の接点を想像するとドキドキする。

・琳派の気風

宗達 光悦から受け継がれてきた琳派の精神の核になるのは「古典を現代に生き生きと息づかせる」「美の本質を探究しつつ、新しい表現を開拓する」ことだと思う。その気風は初代の富春軒仙溪からも感じる。
私の祖父・13世家元も「桑原専溪の立花」の中で次のように云っている。
「まず過去の名作をしつかり研究すること。しかも基礎となる伝統の技術をしつかり研究

して、その上に今日的な作品に及ぶことが、何よりも必要なことと思うのである。伝統の中にありながら伝統にとらわれないように、そんな心を持っているので、作品にもそんな面が出るのではないかと考えている。」

新しいものを生み出そうとする情熱と、それを支える伝統の技の習得。このことこそ琳派の精神といえそうである。



「立華時勢粧」（1688年）より 杜若一色立花



乙女桜の立花

仙溪

立花研修会の花

花型 除心 行の行

花材 乙女桜(薔薇科)

山茱萸(水木科)

異芽柳(柳科)

松(松科)

椿(椿科)

アイリス(菖蒲科)

枇杷(枇杷科)

小菊・スプレー菊(菊科)

花器 陶花瓶(伊藤典哲作)



横から見た奥行き





二種挿しの生花 仙溪

花型 行型 二種挿し

花材 黄金小手毬おうごんこてまり (薔薇科)

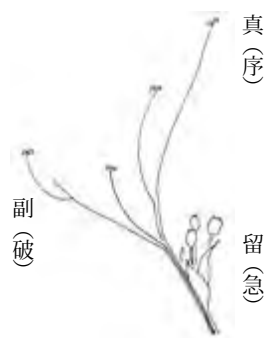
チューリップ (百合科)

花器 白釉花瓶

黄緑色の小さな若葉が可愛らしい。昔から京都の花屋ではサンザシの名前で売られていたが、黄金小手毬きんてまり、または金葉小手毬きんばこてまりという名前の植物で、アメリカ手毬てまりしもつけ下野の仲間だそう。春の芽出し花材の一つである。

比較的握めが効くので生花にもいけられるが、一種でいけるには少し寂しい。チューリップなど春の花をとり合わせて、一株で二種挿しにしたり、株分けや二瓶飾りなどにするといい。

留側のチューリップには、花が小さいもの、葉が丈夫なものを選んでみる。チューリップはぐんぐん伸びるので、時々切り縮めていけなおすようにしたい。



真(序)

留(急)

副(破)



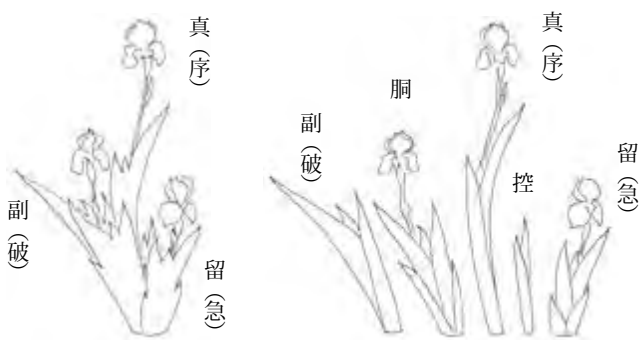
ドイツ菖蒲の生花 仙溪

花型 行型 三花五葉

花材 ドイツ菖蒲 (菖蒲科)

花器 祥瑞広口水盤

ドイツアヤメはジャーマンアイリスとも呼ばれ、ヨーロッパ、アメリカで多くの品種がつけられている。花色によって香りが違い、日本でも多くの花色を育てる人が増えてきた。イチハツの名前で出回るニオイイリスと葉がよく似ている。まだまだ出荷量は少ないが、今後いける機会が増えてほしい花材である。





ランタンキュラス 櫻子

花材 連翹（木犀科）

ランタンキュラス8色（金鳳

花科）

菜の花（油菜科）

花器 中近東手付花器

シャルロット、オーロラ、ハーマイオニー。ここにいったランタンキュラスの品種名だ。さてどれがどれでしょう。

ランタンキュラスは地中海原産。花びらの枚数が多いのが特徴で玉のように大きく咲く。普通は単色なのだが、シャルロットは色の濃淡が絶妙だ。数年前から市場に出ており、値段も高いが花持ちもいい。

そして今年始めて見たオーロラとハーマイオニー。どちらも花卉がフリル状に縮れている。

春の太陽のような連翹の太枝に8色のランタンキュラスを添わせ、葉が厚く茂った菜の花で水際を隠した。微妙な花色の変化が、地中海の碧海と空の色をした花瓶に美しく映える。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
4 月号
No. 646

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カラー・エチオピカ

桜子

花材 カラー「エチオピカ」

(里芋科)

ポピー(罂粟科)

シンピジウムの葉(蘭科)

花器 黒色ガラス花瓶

花茎も太くて長いカラーエチオピカ。南アフリカ原産である。

この様な咲き方を吹き詰(ふきづめ)咲きという。日本では長野県だけで作られているらしいが、今までに数回しか見た事がないカラーだ。

根気よく育てられたらこんな風に咲くのだろうか。湿地を好む宿根性で肥料の与え方も難しいのだろうが、肥沃で暖かな土地も必要だろう。

日本では情熱をかけて野菜も花もめずらしいものが作られていて有難いと思う。

私もあと何度この花をいけることが出来るだろうかといつもその瞬間を大切にしている。ポピーに精一杯開いてもらって足元に添えた。

切りたての一番綺麗な蘭の葉で軽やかな姿に変えて、とっておきのガラス器に飾った。

横から見た奥行き





名脇役

仙溪

花材 白木瓜^{ほけ}（薔薇科）

薔薇^{ばら}（薔薇科）

照り葉椿^{ていりばつ椿}（椿科）

花器 陶花瓶

伸びやかな枝にくっきりと白い花、鋭い棘もボケの個性を際立たせる。大輪の赤バラと投入にいった。でも硬い枝と柔らかな花だけではちよつときくしくした感じがする。その間を繋ぐ何かが欲しくなる。この花をいけたのは2月下旬で、ちょうど照り葉のツバキが飴色に色付いていたのでとり合わせてみたら、しつくりと落ちついた。

いけばなのとり合わせを考える時、この照り葉ツバキのような味わい深い名脇役との出逢いは貴重である。主役を引き立てつつ、物語に厚みを与える存在。それを見いだすのもいけばなの楽しみ。

横から見た奥行き



京都東山花灯路2017

仙溪

花材 山菜萐(水木科)

百合(百合科)

花器 陶大壺(主催者所有)

東山花灯路・後期にいたしたのはサンシユと濃いピンクのユリ。野外で5日間、元気に美しく咲いてくれた。藁葺き屋根を背景にすると、山里の春を連想させる。いけさせていだいた大壺の表面は笹の刻印で埋め尽くされている。京の雅を感じる。



おしゃべりな花達

〆表紙の花〃 櫻子

花材 ユーカリ(フトモモ科)

アマリス(彼岸花科)

シンピジウム(蘭科)

花器 赤色ガラス鉢

毎年珍しくて美しいアマリスに出会う。

今年はアマリス・カリスマという品種。紅のインクを滲ませたような発色。花卉によって滲み方が違う。単調ではない。

園芸品種ではあるが、偶然この色に染まったのか、自然の芸術家がこんな花を作り上げたのか不思議でしようがない。すでに数百品種作られて今も増え続けている。

アマリスはヒガンバナ科のヒツペアストルム属だが、ヒツペアストルムとは馬のように大きくて星のような花という意味らしい。



横から見た奥行き

大輪のアマリスには葉が付いていないので、今回はユーカリを添えた。

アマリスがどつしりと豪華な花なので、動きのあるユーカリとピンクのシンピジウムを合わせて。

凄じ賑やかな花だ。

皆んなが好きな方向を向いてペチャクチャおしゃべりしているようになっちゃった。

オンシジウム

櫻子

花材 オンシジウム・ハニード

ロツプ(蘭科)

都忘れ(菊科)

花器 結晶釉水盤(前田保則作)

テーブルに低く花を飾りたい時、この平たい水盤は重宝する。主張しすぎず、上品な形。飾る場所に合った器を選ぶようにしたい。



立花秘傳抄 二

花之部

桜

祝言。一色。

桜は和朝第一の花にして、名をいわずして花というは桜なり。唐には牡丹を花という。蜀の国にては海棠を花という。本朝、桜を愛するの始めは、人皇四十五代、聖武天皇桜を求め給う時、やまとのくにがすがのうしろ大和国春日後三笠山に八重桜あり。是をえいぢらん観覧ありて、則四言詩作り光明皇后へ送り給う。詩に曰く、昌春季 山山美花 不見玉女 多恋歌

この詩、一句三字なり。句ごとに上の一字を二度読むなり。或人詩の心を歌に読む、日にそえてとりこそ社まされ山桜いもに見せばや夜こそねられね。かんぎよ天皇還御の後、きさき后この桜を見度よし仰せらるるゆえ、みかど帝則奈良へ移し植えられ侍り、その後今の都へもこの花うつし来せしなり。百人一首伊勢が歌に、いにしえの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬる哉、これよりして後、うえ上一人より、しも下万民にいたるまで、詩を詠じ、うたを読む。連俳共にせいをみがき おもいをわよひ研精覃思は、皆この花を賞美したる物なり。況や



第百十五図
立花 桜一色真
(初版では富春軒)
桜 苔 万年青
小羊園

花道においてをや。余木余草よぼくよそうに立てまぜずして一瓶を成就じょうじゆす。これを真の二色と、皆桜ともいいて、大きに秘伝とする所なり。たとえ又余木余草を立てまじゆるというも、花の咲くことなき草木をあしらひばかりに用いるなり。皆これ桜を、第一の花と尊美そんびしたる心なり。

本草綱目に図する所の桜、日本の桜にあらず。唐の詩文を勘ふるに、王荊公おうけいこうが山櫻さんおうの詩一首のみ有り。

山桜抱石映松枝

比並余花発最遅

頼有春風嫌寂寞

吹香渡水報人知

和名、吉野草。夢見草。尋源草。かさし草。人丸草。

雲見草。曙草。あだな草。手回草。

蔵玉集

尋ね行く吉野の山の尋源草花より上にかかるし

らくも

植え置きて見る人やある夢見草明日をもしらぬ

けふの命を

斎宮花尽異名

雲は猶立田なほの山の手回草ゆめの昔のあとのゆふくれ



王荊公おうけいこう王安石（1021～1086）北宋の政治家、詩人。

第百十六図
立花 桜二色
（初版では富春軒）
桜 苔 伊吹
檉木 柘植
小羊齒

桜の立てまげて苦しからざる物、松、いぶき、檜、榎、
黄楊、榿木、白榿、小しだ、わくら、くまざさ、かなめ、
外これになぞらうべし。

桜真の一色の時、前置におもとを用いる事、常の事
なり。ある人の曰く、皆桜という時は前置までに桜を
用うべきに、何とおもとを用いて皆桜といい、又は
一瓶に伝受の一色と、伝受の前置と、二つ有る事は相
うばうに似たり。いづれを賞翫とすべきや。答えて曰く、
口伝あり。

桜に晒木用いぬ事は、桜は高山の物なれど松檜にか
わりて木の性かたからず。よわいも久しからざる物ゆえ、
晒木とはならず。古人これをかんがみて法式を定めたり。

世上まれなる初桜などは一色ならずとも立ててく
るしからず、といえる流儀ありとも、ゆめゆめ用いべ
からざる事なり。



第百十七図
二株砂物 桜一色
(初版では富春軒)
桜 苔 伊吹
柘植 万年青
榿木

立華時勢粧の

「紅葉一色と桜一色」

先月と今月で紅葉と桜の「一色立花」を6図掲載した。

「桜は諸花の頭、楓は紅葉の長」と書かれているように、極めて大切な立花図が連続で登場したことになる。百十八図のほぼ最後に登場し、それらすべてが見開きの図版であることから、力の入れようが伺える。

「紅葉を尊敬する心」「桜を尊美する心」から、ほかの草木をとり合わせる場合、紅葉には「紅葉しない草木」や「色有るを嫌って菊も白花」、桜には「花の咲くことのない草木をあしらひだけに」用いるようにし、あくまでも紅葉を引き立て、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。自然の美に対する敬意が強く感じられる部分だ。

「高雄山の紅葉のように峰より染め」「吉野山の桜のように麓より咲く」ように立てよとは言うけれど、「伝授多くある」ので初心のうちはこれを立てないようにも書いている。この部分を私なりに解釈するなら、高雄山や吉野山のようにしないといけないなどと囚われるよりも、まずは手にした枝をのびのび生かすことの方が大事なんだよと言っているように思う。

実際の立花図を見ると、紅葉については2つの図で峰より染まっているように感じられ、紅葉だけで



立てた真の一色にはそれは感じられない。先月号でも述べたが、一本の楓の大樹のようである。

一方、桜の立花図を見ると、一見どの枝も少しの蕾がのぞくものの、ほぼ満開のように見える。桜はこだわりなく自由に立てているのだなと思つたが、よくよく見ると「砂の物」の控枝と流枝には蕾が極めて少なく、真や請の梢に蕾が多めであるように感じる。麓から咲き上げる様子をさりげなく写し取っている。

また、紅葉と桜の図を見比べると、楓には晒木、桜には苔木がそれぞれ効果的に使われている点にも注目したい。肝心なのは自然を手本にするということ。

そして又、桜を詠んだ聖武天皇の詩が面白い。一つの漢字を一度はそのまま読み、もう一度は二つの字に分けて読むというユニークさに驚かされる。他にも中国の杜牧や王安石の詩を引用しながら花の知識を深めさせてくれるなど、豊かな教養に加えて、読む側を花の世界へ引き込むような文章の力を感じる。

立花時勢粧の中でも特別な6つの図を掲載したことで、この連載の責任の重みのようなものを改めて感じている。流祖の技や思いや心といったもの、選ばれた詩や言葉たち、そして絵図から読み解く様々な教え、それらを一つでも多く手に入れるための手がかりとして、内容の紹介を続け、深めてゆきたい。



京の冬の旅協賛
 第38回 京都名流いけばな展
 第6次展
 会期 2月28日(火)～3月5日(日)
 会場 JR京都駅新幹線コンコース



山茱萸の生花 さんしゆゆ

仙溪

花型 草型 留流し

花材 山茱萸 (水木科)

花器 銅薄端

2月末に京都駅新幹線コンコースにいったサンシユの生花を持ち帰って撮り直した。春の花木が日に日に開いてゆく様は、確かな春の訪れを感じさせてくれる。

韓国の現代美術作家が訪ねてくれた時、韓国でもサンシユと呼び、春一番に咲きますと教えてくれた。彼はこの夏の二条城でのイベントに出品すること。再会が楽しみだ。花を愛する心が人と人を繋ぐ。

横から見た奥行き





連翹と椿の生花

仙溪

花型 草型 副流し
花材 連翹 (木犀科)

乙女椿 (椿科)

花器 煤竹竹筒

連翹は立華時勢粧にも見られる落葉低木で、春の陽光を感じる黄色い四弁花が、しなやかな枝に連なつて咲く。「翹」という字には「反る、はねあがる」という意味があり、レンギョウの飛び跳ねるような枝の姿を連想させる。ところが、レンギョウの中国名は黄寿丹で、中国ではオトギリソウの仲間を連翹と呼んでいるそうだ。古く漢方薬として日本に來た時に、よく似た実なので間違えてしまったようだ。たとえ誤用だとしても、連翹の字とともにこの花を私達は愛している。





出逢い花（29）

仙溪

躑躅（躑躅科）
つづし

おうごんいたやかえで
黄金板屋楓（楓科）

花器 古陶壺

去年の4月に撮った写真。花展に出品したツツジの生花の残り枝が美しく花を咲かせたので、カエデ一本と出逢わせた。たった二本のいけばなだが、直角に曲がったツツジの横枝が面白く、赤い花と明るい緑の葉の対照が鮮やかだ。味わい深い枝であれば、このように大きな器に付けて、釣り合いのとれる相手を一本探してみるのも楽しい。

器と花と緑、器と枝と花。そういうシンプルないけばなの楽しみ方が、出逢い花には詰まっている。肩の力を抜いて、木や花のあるがままの姿を器に託す。そんな時にふと、見過ごしていた美しさに気付いたりするので。

レモンだよ

庭でも室内でも春を満喫中のレモンちゃんです。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
4 月号
No. 658

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





(表紙のいけばな解説Ⅱ5頁)

i m a g i n イマジン

今年の華道京展のテーマは「イマジン」。想像する・心に描く、という動詞である。

花をいけるととき、どんな場所にどんな器でどんな花をと、まず心に想い描くのが出発点だ。そして花の気持を想像しながらいける。そう、まさしくイマジンに欠かせない。

「想像の翼をひろげる」と、NHKの朝ドラ「花子とアン」で主人公がよく口にしていたのを思い出す。「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子の物語だった。不安を抱く苦境の中で、主人公は想像の翼をひろげて前へ進む。想像の翼は未知の世界への扉を開く勇気を与えてくれる。

ジョンレノンのおまりにも有名な曲「イマジン」。彼は歌の中で、戦争の無い世界を想像してごらん、と語りかけてくる。平和を手に入れるには一人一人の想像力が鍵となる。

こうありたいと想像することで勇氣や希望が生まれ、相手のことを想像することで優しい気持ちになれる。イメージすることの大切さを思う。

今回の華道京展で、どんなイメーজの世界に出会えるか、皆さんの花が楽しみだ。

くろめやなぎ あずきやなぎ
黒芽柳と小豆柳

△2頁の花▽ 仙溪

花材 黒芽柳(柳科)



横から見た奥行き



横から見た奥行き

アンブレラファーン
 ^ 3頁の花 ^ 桜子
 花材 カラー (里芋科)
 ラナンキュラス (金鳳花科)
 アンブレラファーン
 (裏白科)
 花器 青色ガラス鉢
 オーストラリアから輸入される葉
 ものは種類が年々増えている。
 シダ類のアンブレラファーンも傘
 の様な面白い形で洋とも和ともつ
 かない不思議な雰囲気だが、全体に
 瑞々しさを与えてくれる。

小豆柳 (柳科)
 アネモネ (金鳳花科)
 花器 ガラス花器
 2種の柳を混ぜていけるのもいい
 ものだ。アネモネが良く似合う。



ヤマボウシ

仙溪

花材 ヤマボウシ
山法師 (水木科)

アリウム・ギガンチウム

(貝母科)

擬宝珠の葉 (百合科)

花器 陶花器 (前田保則作)

昨年6月にアメリカのヨセミテ国立公園を訪れたとき、野生のハナミズキの純白の花に迎えられた。花の時期は過ぎていたが、葉が茂る中ひととき大きく咲いた花は神々しかった。

ヤマボウシはハナミズキの近縁種で、日本の山の谷間に生える。中心の花を法師の頭に、白い総苞を頭巾に見立ててこの名がある。やはり神聖な雰囲気の花である。

ギガンチウムを人を見ると、花山に分け入る山法師というところか。



ヨセミテ公園のハナミズキ



横から見た奥行き



ブルビネラ

〈表紙の花〉 櫻子

花材 ブルビネラ(ツルボラン科)
 シーグレイプ(蓼科)
 トルコ桔梗(竜胆科)
 花器 歪型ガラス花器

春の到来を告げる南アフリカ原産のブルビネラ。オーニソガラムなどにも似ていて、目立った特徴も無く平凡な花と思っていたが、この春一番に入ってきたものは、カラフルで背も高く今までと違う花型にもなった。一本の花からは何百輪も花を咲かせるらしい。そのせいか花を支える茎がしっかりと固くて長くいける



横から見た奥行き

ことも出来る。

白、黄、ピンク、オレンジ、朱赤と少しずつ違う色を買い求めていけてみた。足元にはシーグレイプ(浜辺蒲萄)の葉とグリーンのトルコ桔梗を。シーグレイプはカリブ海などの海岸地帯に自生するタデ科の木だが、白い花を咲かせ紫色の実がなるのでこのように呼ばれている。フレッシュな切り枝を使えるようになったのは最近の事だが、微妙な色と赤い葉脈が美しい葉だ。花器や敷物の色も加えて渋い赤でまとめてみたいと思った花。

【記録】

京都東山花灯路

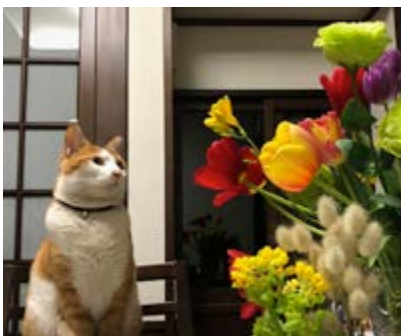
「いけばなプロムナード」

前期 3月9日(金)〜13日(火)

会場 春光院前

出品 桑原仙溪

青い惑星のような丸く大きな器に、赤花のカラモモ(唐桃)の太枝をいけた。以前、西吉野の花木の産地を見学した時に、低く横に手を広げるようにカラモモが育っていた。普通の桃と違って、枝がごつごつした感じである。いつもは瑞々しい葉をもつ花を合わせるのだが、今回は敢えて一種でいけてみた。唐桃一色というところか。



レモンだより
 食卓の花を愛でるレモン師匠。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ④

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

牡丹

祝言。上中。

異名 木芍藥 もくしやくやく 百両金 ひやくりやうきん 国色 こくしよく 醉西施 すいせいし

和名 ふかみ草 はつか草 てるほ草

名とり草

万葉

名ばかりは咲ても色もふかみ草花咲くならばなににしてまし

藏玉集

折人の心なしとや名とり草花見るときはとかくすくなし

群花品の中に牡丹をもつて第一とす、ゆえ花王という。その花芍薬に似て、宿幹しゆくかんは木に似て、もつて木芍薬と名付く。通用の証文なり。

牡丹、毎年十二月の数に应じて花のしべ十二

あり、閏年うるうとしには十三あり、故に十三紅という。

牡丹は午うまの時に花殊ことに盛んなり。故に猫を繫つなぎ置きて時を知る。

歌に

六つ丸く五七玉子に八と四は梯のきねなり九つ針

第九十四図

立花 牡丹除真

牡丹の心(真) 桑原次郎兵衛

牡丹 藤松 柘植 躑躅 細苔 熊笹 鳶尾



牡丹は花王と云い、名を貴び、高位高官の御方にて宗匠のほか、門弟の指すことをゆるさず。古代は花大切なるゆえ、木を残して茎より切り、筒に入れ、胴どうに用いて請副うけそえに使わず。誠に立花の道理さもあるべきことなり。しかれども近代、心請添しんけいそえに用いるは、世上沢山にて時相応なるべし。

藤の花

祝言。上中。

紫藤 ふじのはな 招豆藤 しょうずとう 珠藤花 しゅとうか

和名 二季草 春より夏に咲からるによりてい

う 松見草

蔵玉集

夏色の花や侍らん二木草松の下枝にかか
る名なれば

同

そよやけふおりあふ春もくれにけり松見
草にも花咲きにけり

本草綱目に草木の部を除いて藤のぞの部に入た
り。又歌書にも草の部に入る。徒然草には草

は藤、山吹などあり、立花の上にては通用
に使うなり。すべて蔓の類は皆通用なり。ほ
かこれに比なぞえて知るべし。

第九十二回

立花 藤除真

藤の心（真） 一步子（初版では富春軒）

藤 松 檉木 躑躅 柘榴 小菊 鳶尾 嫩



比なぞえて||なぞらえて

藤に立てる松は、心、請、副、控枝にかぎらず、幹みきくるい枝葉古めき老いたる松の、藤にいたみたる風情ならでは景氣うつりがたし。これ一つの習いなり。

藤は木にたより、松にまといて生える物なれば、瓶に立てるにもその姿を専らにする。心、請、控枝、の内いづれの枝にても、一重二重まといして出生をあらわす。しかれども松、藤、の二木取り合いよくかない、自然の景氣うつらば、一重二重にかぎるべけんや。

松に藤をまといせんと思わば、藤のつるを多くあつめ、松の幹にとり合わせ景氣相応したるを用い、扱さ花は木かげよりあしらい出して、たよりたる体を指さず。

藤のしだれ、瓶の口より下がりても苦しからず。一切のしだれ物、指し合いなり。紫藤を指す時は杜若は白きを用うべし。

牡丹が貴重な花なので、短く切って使うべきなのを承知の上で、近年は栽培が盛んになったので真に使っても良いのではと、独自の判断を述べている。九十四図が秘曲の図の中の「牡丹の心」である。

藤は5つの図に見られ、「牡丹の心」にも白藤が使われている。

九十二図も秘曲の図で「藤の心」と名がつく。S字に昇る蔓を真にして中段に白藤が下がる。赤とピンクのツツジが彩りを添えている。

二十七図は松枯れの真に藤の枯れ蔓をまわりつかせ、自然の厳しさを感じる独特の景色が見事だ。副と見越に紫の藤が垂れ下がり、流枝と請を兼ねた松が立ち昇る。その対比に植物の命が漲みなぎっている。

第二十七図

立花 藤除真

除真の内草の花形 坂田任性

藤 晒木 松 柘植 躑躅 檉木 小羊園





桜と連翹の立花

仙溪

花材 啓翁桜(薔薇科)

連翹(木犀科)

照り葉椿(椿科)

椿(椿科)

檜葉(檜科)

喇叭水仙(彼岸花科)

小菊(菊科)

花器 銅立花瓶

NHKで東北の桜をテーマにした番組を見た。北国では桜の開花を心待ちにする気持が強く、多くの桜の名所を生んできた。その桜の周囲には黄色の花が咲いている。菜の花や連翹だ。黄色は春の温もりを感じさせてくれる。

立花時勢粧では、桜には他の花の咲くものを交えないこととされているが、彼岸桜や啓翁桜のような小輪の桜には品良く春の花を添わせたくなる。山里の春を想い描いて、啓翁桜と連翹を主な役枝に配して立ててみた。

春の立花では正真の花に悩む。桜の立ち枝や伊吹などを正真にしてもいいが、今回は人里の庭に咲くラッパスイセンにした。

横から見た奥行き





山茱萸とアマリリス

仙溪

花材 山茱萸（水木科）

アマリリス（彼岸花科）

花器 陶花器

上級者向けの稽古の見本にいった投入。何日か経って花が咲いたところを写真に撮った。蕾の時には無かった華やきが感じられる。

山茱萸は太くて力強い枝だったが、合わせたアマリリスも負けていない。原産地こそ東アジアと南アメリカで異なるが、どちらも春の花同士なので違和感はない。

アマリリスの花の茎は空洞なので、茎よりも長い割り竹を入れて支えにしている。

2種だけでいけるには、花器の口元をどう見せるかがポイントとなる。

横から見た奥行き





啓翁桜とチューリップ

仙溪

花型 生花 株分け

花材 啓翁桜 (薔薇科)

チューリップ (百合科)

花器 小判型陶水盤 (伊藤典哲作)

春の公園で見かけるようなとり合わせ。生花にもそんな楽しみ方があっていい。啓翁桜を主株に、チューリップを子株に付けて株分けにした。

剣山で枝物の生花をいけるのは、かえって難しいかもしれないが、太めの幹をうまく使えば足元も整いやすい。水盤にいけることができ、花器の選択の幅がひろがる。作例のように株分けで季節の草花を合わせることのできるのも、時々には嬉しい。

横から見た奥行き





花器の選択

仙溪

花材 オクロレウカの葉（菖蒲科）

アイリス（菖蒲科）

宿根スイートピー（豆科）

花器 紺色釉陶鉢

紺色の鉢がうまく合ってくれた。この花器は父も好きでよく使っていたが、花の色彩を鮮やかに見せてくれる。また葉の緑も優しく感じられる気がする。器によって花の印象は違ってくる。

土っぽい自然な風合いの花器に比べると、花は素朴な自然の表情を見せてくれる。また、艶の有る釉薬の施された器に比べると、少し余所行きの表情になる気がする。そしてその色によっても味わいが変わる。

自分が表現したいのは何か。どんな味わいのいけばなのかをはっきりさせて、それに合った器を選びたい。

紺色の器に黄色のアイリスが映える。宿根スイートピーは別の木の枝で支えていけている。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
4 月号
No.670

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





レオントキール

△2頁の花▽ 桜子

花材 レオントキール(アルスト

ロメリア科)

キヤスケード・シンビジウ

ム(蘭科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 赤ガラス花瓶

レオントキールはライオンの手という意味だそう。アルストロメリアの仲間、南米原産の蔓性植物。地面を這うように育ち、伸ばした花茎の先に丸く花が集まってつく。元々寝そべっていたものなので、あまり無理な長さにいけると茎の途中で折れるので注意したい。

キヤスケードタイプのシンビジウムをからめるようにいけるとレオントキールとよく調和してくれた。背の高い赤いガラス花瓶に無造作に投入してみたが、花材の面白さで独特の雰囲気がつくれた。

横から見た奥行き



△表紙の花の解説は5頁▽



ビオットの陶器

△3頁の花▽ 仙溪

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

鉄線4種(金鳳花科)

花器 緑釉陶鉢(フランス製)

この緑の陶鉢はフランス製。表紙の紺色の陶鉢も同じで、刻印から



調べるとビオットの陶器だとわかった。ビオットは南仏ニースとカンヌの間に位置する街で、古くから製陶で栄えたが、今はガラス工芸も加わっている。

この2つの陶鉢は父・仙齋が好んで使っていた。父がいきたい花をすんなり受け止めてくれる不思議な器だ。たっぷりとしたモダンないけばながよく映る。

横から見た奥行き





木瓜と椿の生花 健一郎

花型 草型 副流し

花材 木瓜（薔薇科）

椿（椿科）

花器 天女文銅花瓶



ベトナムにて

健一郎

ベトナムに着いても実感が湧かずにいた。ツアー旅行では1人でどこかに行くことがなかなか難しい。次の日の朝は早起きをしてホテル周辺を探索してみることにした。

ホテルから一歩出るとタクシーはもちろん、バイクの2人乗りで駅まで送ってくれる人で溢れかえっている。「안녕」「你好」「ここにちは」下手な鉄砲を幾つも駁（か）わしながら目抜き通りまで歩いた。すると前輪が2つ後輪が1つの三輪自転車（三輪車）の前に座席を取り付けた人力タクシーのお兄さんが拙（くた）い日本語で乗らないかと話しかけてくる。断って散歩を続けようとしてもしつこく乗らないかと言ってくる。乗りませんときつづく言

ミモザアカシア

〈表紙の花〉 櫻子

花材 ミモザ（豆科）

エビデンドラム数種（蘭科）

花器 紺釉陶鉢（フランス製）

3月3日の倉敷でのお稽古は新鮮なミモザをいけさせていただいた。お弟子さんの庭に育っていたもので、フワフワの花の付いた切りたての枝を沢山持つて来てくださったので、バラとマーガレットを取り合わせて贅沢な稽古をすることができた。お弟子さん達も大喜び。

ミモザが黄色い花をつける季節、毎年3月8日は国際女性デーらしい。イタリアではこの日、男性から女性にミモザの花を贈り、女性達は家事からも育児からも解放されるそう。なんと羨ましい。残念ながら日本にはそんな習慣はないが、ミモザのお蔭で貴重な春の楽しいひと時になった。テキストではカラフルなエビデンドラムと取り合わせた。

横から見た奥行き



ベトナムにて

健一郎

ベトナムに着いても実感が湧かずにいた。ツアー旅行では1人でどこかに行くことがなかなか難しい。次の日の朝は早起きをしてホテル周辺を探索してみることにした。

ホテルから一歩出るとタクシーはもちろん、バイクの2人乗りで駅まで送ってくれる人で溢れかえっている。「^{おはよう}안녕」「^{你好}你好」「^{ここに}ここには」下手な鉄砲を幾つも躲かしながら目抜き通りまで歩いた。すると前輪が2つ後輪が1つの三輪自転車の前に座席を取り付けた人力タクシーのお兄さんが拙い日本語で乗らないかと話しかけてくる。断って散歩を続けようとしてもしつこく乗らないかと言ってくる。乗りませんときつく言

い返そうとしたタイミングで握手を求められた。いざ握手をしてみると感じの良さそうな人だったので乗ることにした。運転手によるとこの乗り物はシクロというらしくなかなか乗り心地が良い。どこか行きたいところはないかと聞かれた。ベトナム人の生活が見たい旨を伝えると、ハンドルを反対に切り、細い道に入った。そこで見た光景はまるで映画の中に入り込んだような世界だった。

学校に行く前に外の屋台で朝食を済ます学生、2人乗りのバイクに4人で乗る家族、バイクの5倍もある荷物を上手いこと運んでいる様はまるで曲芸師のようだった。携帯電話で写真を撮ろうとするとバイク乗りに盗まれる可能性が高いらしく、そういう状況では好奇心が更に強く刺激される。1時間ほどガイドしてもらった後80ドルを支払ってホテルに帰った。後から聞いた話によるとベトナムの物価では2ドル〜3ドルで乗れるらしい。完全主にしてやられた。握手をした時に勝負は決まっていたらしい。

今世界のどこに行ってもあるブランド街や、観光地の大衆化でその国ならではの文化が過去のものになりつつある。各地に散りばめられている、僅かな歴史の残り香を嗅ぎ分けられるように嗅覚を鋭敏にしておきたい。全身でその土地を感じ、生け花で表現をする。そんな贅沢な事を是非してみたいものだ。

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

檜扇ひのうぎ

祝言。心に用いる。上中下。

射干からすおろぎ (弓の長竿の形のごとくなるによりて
しゃかん)

名付く。

扁竹 (その葉偏生にして根竹のごとし)。

鬼扇きせん。他人掌しやう。鳳翼ほうよく (みな形によりて名付
く)。

藏玉集

よもぎふはさることなれや庭の面から

す扇のなと茂るらん

檜扇瓶毎に用いるといえど、能く遣う人ま
れなり。初心の内はかこいに用い、間あきを
ふさぐ物とのみおもうにより替わりたる手も
なく、意気はづみも出きざるなり。巧者は心
を付けて指すべき事なり。



草花砂物草

中野氏

第百十八図

一株砂物 檜扇真

草花砂の物草

中野氏 (初版は富春軒仙
溪)

檜扇 芦 杜若

仙翁花 百合

擬宝珠 小菊 桔梗

檜扇を多く遣いたる立花には、大葉はたらかず、又芍薬に取り合いよろしからず。よくよく心を付けて用いるべし。

薄^{すすき}

祝言。上より遣い下りて中までも下る。通用にあらず。

蕉草。大きなるを芭蕉と云い、小さきなるを石毛と云う。

和名、尾花。袖波草。乱草。

立花名、萩すすき。冬薄（冬がれせぬすすきなり）。

高倉院齋合歌

我宿の庭にまれなる露會草かたよるはかり風やわたらん

天智天皇花尽異名

水はなし風にこそたつ波はたたた沢波草^{しき}を折にまかせよ

薄の心は葉付き面白を見立て、もしはたらしきなき時は二本合わせて一本に見ゆるように細工して指すべし。又心にうら葉ばかり見ゆ

る時は、表葉を外にあしらうべし。

薄は葉多く付きたりとも、茎一本に見ゆる時は陰陽不合とてこれを嫌う。たとえ葉二枚立てるとも茎を見せずして立てる時は二もとと

第十九図

立花 薄除真

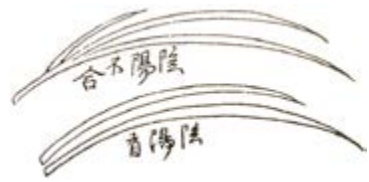
除心の内行の花形 左流枝立 林昌

薄 菊 松 梅擬 熊笹 柘植 小菊

夏はぜ 小柏 著我



見なしてこれをゆるす。



薄ひらめに遣うをよしとす。副ばかり、請ばかりに遣うを片なびきという。心、請、副と両方に立てるを両なびきと云う。片なびきは古風なり。もろなびきはたらきあり。さりながら法度にあたる事多し。

薄二枚三枚遣うとも、茎一本に葉をいまいづつ付けて遣えば、葉のはたらき自由なり。又茎をたむる時は頭より竹釘をさせばためもどろず。

すすきは副、請の物とばかり思いて遣う時はかわりたる手もなし。つや、あしらいなど

に遣う時は珍しきもあらかし。

唐黍

祝言。上中。

玉蜀黍。蜀黍。とうきび 葉使い薄に同じ。



筑摩九郎右衛門

第六十四図
立花 梅擬除真
筑摩九郎右衛門
梅擬 薄松 松笠 菊 椿 柏 水仙 嫩



シャルロット

仙溪

花材 虫狩（忍冬科）

ラナンキュラス（金鳳花科）

花器 陶花瓶

洋菓子にシャルロットというのがある。女性の帽子に見立てたケーキで、パン、スポンジケーキ、ビスケット、クッキーなどを型の内側に貼り付け、その中にフルーツのピュレやカスタードなどを詰めて冷やしたものである。ラナンキュラス・シャルロットもケーキのシャルロットのように、女性がときめく夢のような花である。

沢山の花をつけた立派なムシカリを見つけたとき、ラナンキュラス・シャルロットと出会わせてみたいと思った。山育ちの青年と都会育ちの令嬢の組み合わせ。微妙な緊張感がただよるのはつなぎ役の緑を加えそこねたからだろうか。

横から見た奥行き





シロバナハナズオウ

△10頁の花▽ 仙溪

花材

白花^{しろはな}花蘇芳^{はなすおう}（豆科）

芍薬^{しゃくやく}（牡丹科）

鳴子百合^{なるこゆり}（百合科）

花器

市松文陶花瓶

ハナズオウは葉が出る前に赤味を帯びた紫色の花を枝いっぱいにつける。春のいけばな展でときどき使われているが、普段の稽古にはあまり出てこない。白花の品種に赤い芍薬をとり合わせて投入にした。

スオウとハナズオウは同じマメ科ではあるが別の植物である。スオウからは黒みを帯びた赤色の染料が採れ、この色を蘇芳色^{すおういろ}と呼んでいる。ハナズオウの花は枝に直接つくので、枝全体が赤紫色に染まって見える。花色は蘇芳色というよりも、スオウで明るめに染めた布の色に近い。スオウで染めた布を枝にまとうているみたいな木ということだろう。

ハナズオウはマメ科・ハナズオウ属の落葉低木で中国原産。スオウはマメ科・ジャケツイバラ属の小高木でインド、マレー半島原産。スオウは古くに渡来しており奈良時代以降、貴族や僧侶の衣服を彩ってきた。もうすぐ行われる皇位継承の儀式でも、スオウで染めた衣を身につけられるかもしれない。



シャクヤク

△11頁の花▽ 仙溪

花材 満天星^{まんてんせい}（躑躅科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 染付花瓶

春のいけばなにシャクヤクは無く
てはならない存在になってきた。暑
さに弱く、水揚げもいいと言いが
たいが、大輪種も小輪種も丈夫で美
しい品種が出て来るようになった。
葉のしつかりした品種なら緑の枝も
のとシャクヤク2種でいい。葉がた
よりなければナルコユリなどで緑を
補いたい。

シャクヤクはボタン科・ボタン属
の多年草で中国北部～朝鮮北部原
産。日本へは古く生薬として渡来し
ている。英名はジオニーで、ギリシャ
神話の医の神ペオンに由来するが、
ギリシャ神話に登場する花がシャク
ヤクだったかは定かでは無い。
ドウダンツツジと芍薬は相性がいい。

横から見た奥行き





コデマリ チューリップ

仙溪

花形 生花 草型 副流し

花材 小手毬（薔薇科）

チューリップ（百合科）

花器 陶水盤

コデマリの生花は枝振りを生かすことが肝心。真の枝は中心線をまたいで垂れ下がるが、枝の上部が中心に乗るようにバランスをとる。撓める時は枝の気持になつてストレッチするごとく撓めるといい。

横から見た奥行き



レモンだより

健ちゃんなにしてんの！。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
4 月号
No.682

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





薔と豆の花 げんまい

△表紙の花▽ 櫻子

花材 薔 (薔科)

エビデンドラム (蘭科)

豆の花 (豆科)

花器 赤ガラスコンポート

この花をいけたのは3月初旬で、丁度沖繩からゼンマイが届いたところだった。花屋のパケツに入っていると目立たないのだが、飾ってみると小さく巻いた若芽が可愛らしくて、一気に春らしい花になった。柔らかくてひ弱そうに見えたマメノハナも添え木をしていけるとぐんぐん成長してくれている。

毎日花から元気をもらっている。



色合わせ

△2頁の花▽ 健一郎

花材 山吹 (薔科)

紫蘭 (蘭科)

花器 環耳陶花瓶 (竹内眞三郎作)

色合わせも生け花をする上で大切な要素の一つ。



紫蘭は自然の葉を生かして。しゃんとした若々しく凛々しい印象を受ける。副家元が選んでくれた敷物で印象が変わる。



若い青さ

△3頁の花▽ 健二郎

花材 本桜（薔薇科）

椿「月の輪」（椿科）

オクロレウカの葉（菖蒲科）
あやめ

花器 紺釉陶鉢

本桜と椿の2種だけでも格好は良いが、オクロレウカを出逢わせて。若い青さがまもなく訪れる季節を思わせる。本桜とオクロレウカが競い合う様。立派な本桜だったので勢いを出し、椿で留める。





ドラセナ

△4頁の花▽ 櫻子

花材 ドラセナ・ソングオブインディア

ディア (竜舌蘭科)

カーネーション (牻牛儿苗科)

スイートピー (豆科)

花器 陶鉢

ドラセナ・ソングオブインディアのフサフサした豪華な葉。足元隠しにとりあえず入れるのではなく、主役に見せたいと思う。

大輪深紅のカーネーションは茎も太くて存在感がある。純白のスイートピーでメリハリがついた。

横から見た奥行き



『選択力』

稲が伝わり、食物の貯蔵が可能になり、動物を家畜化する。食に困らなくなると物の交換が盛んになり、生産性が高ると物の選択ができるようになった。

物がありすぎる時代と言われてから長い月日が経った。何が何かわからない機能が沢山ついた機械で物が溢れかえっている。酷いものになると何をする為の機械だったか、分からない製品でさえあるほどに。

そこまでこだわりがないものに対して質問をされると困る。使えたらいいのだ。店員さんは僕に少しでもあった物を提案したく、多くの質問を投げかけてくる。店員さんには悪い気がないのは十分承知だ。だから店員さんの顔はイキイキとしている。僕が「必要最低限の機能が使えるら充分です。とりあえずこれを下さい。」なんてとても言えない。店員さんが好きでその職業についていたとすると、少し悪い気がするのだ。

生活をより便利にしようとする物を買う。いつか使うかもしれない機能は絶対に使わない機能だ。多機能は本質の性能を曇らせる。あれば便利な物は、無くてもたいして困らない。

その一方で、同じ用途のものは一

つだけで良いんですよと言われたことがある。飲み物を飲むという用途に必要なのは住人の数だけのコップだけで良いというのだ。単純明快で好きな考え方ではあるが、少し違う。僕の「好み」がこの考え方に歯止めをかける。人それぞれ好みはあるが、その飲み物が一番美味しい形態の器は確かに存在する。湯飲みに入った水なんて飲みたくない。

朝のコーヒーをお気に入りの湯飲みで飲む。湯飲みなのだが、何故かコーヒーを入れてしまう。他のどのコップで飲むより美味しいのだ。少し余ったコーヒーをミルクで割って飲む時は、洗ったコップが増えようが大好きな青磁のマグで頂く。なぜならばマグで飲むミルクコーヒーの方が美味いからだ。液体が漏れなければ何で飲んでもいいわけではない。これが良いのだ。同じ物を食べるにも、飲むにも器が変わるだけで味が確かに変わってしまうのだ。食べるだけ、飲むだけだが、自分にもたらされる効果を鑑みれば一度身の回りのものを自分が本当に好きで使っているかを考える価値はおおいにある。

新しい湯飲みを買うとする。材質や価格帯も様々で選択肢の多さに圧倒され、選びきれない。そこでその選択を助けてくれたのが、TVのコーナーシャルや新聞などの広告であつ

た。数多くの選択肢の中からその商品の印象を良くさせる働きがあり、他の物とは違う特別なものになる。

果たしてそれは本当に自分が好きで選んだもののだろうか。

ネットで買い物をするときに、「あなたにおすすめの商品」が表示されることがある。これはAIが、検索履歴や購買履歴などを参照して、数多くの商品の中から、おすすめの商品を表示してくれるものだ。消費者はこの「おすすめの商品」のおかげで、膨大なラインナップの中から商品を選ぶ必要がなく、機械が勝手に選んできたものの可否を判断するだけでよくなってしまった。

こうして、選ぶことをやめた人たちは、自分の知り合いやネットで活躍するインフルエンサー（影響力の強い人）の口コミに信頼を寄せている。

テレビCMに演出効果があることは、すでに多くの消費者が認知している。だから信頼する友人や口コミを信じて物を買う。こうした購買方法は、「自分の感覚だけで選んで失敗したくない」「選ぶ時間をもったいない」「みんながいいと言っているものが欲しい」などといった欲求が強いからである。

人の感覚で選ばれた商品に囲まれ

て豊かさは、もたらされるのだろうか。

ここ最近、強い同調圧力のせいで、自己の表現が億劫になりつつある。人に流されやすい自分を誰しもが感じたことがあるだろう。そこで同調圧力に立ち向かうための武器がいわゆるイチャモンと言われるものである。声を大にしてイチャモンをつけたのなら大したものだが、小さい声、心の中で呟いてもいい。

物事を否定する力は自分の中に芯がなくともできる。わがままになれればいいのだ。そして少しずつ培われた自分が、何が好きで何が嫌かを軸に否定する。上辺で人に合わせ続け自分を見失ってしまうほどでもない事はない。

自分の決めた、大きなろくが小きからうが選択の一つ一つが自分の未来を限定させていく。

よく登場する手先の器用な知り合いは、会うたびに仕事の愚痴ばかりを言う人だった。嫌な仕事なら放つてしまえば良いのにという誰でもできるアドバイスをしてみた。やりたくも無い仕事をしている意味が僕には意味がわからなかったただけである。その後彼女は自分で仕事を辞めた。今は自分の好きな仕事をしてい

る。指輪作りの仕事だ。人間関係の話はほとんどなく、どんな指輪を作りたい、こんな作業が楽しい、こんな面白いお客さんがききあって、といったぐあいに話を聞いていても退屈しなくなった。

いつ住む場所を変えてもいい。いつ仕事を変えてもいい。嫌な事をしてる人がいると言うがそれはその人の選択である。新しい事をするリスクをおそれ、居心地の悪い場所に留まり続けているのだ。変わらないこともリスクである事を忘れてはいけない。

自分で決めた事は全て、自分のおかげとも言え換えることができるのではないだろうか。失敗しても人のせいにできないため、結果を受け止め新しい選択をすればいいだけだ。

「選ぶ力」は選ぶ物がどんどんと増えていく今の時代には必ず求められる力になると考えている。大概のものはすでにそこにある。何を選ぶかである。「これでいい」から、「これがいい」に変えるだけの簡単な話である。



『慕婦繪々詞 巻1』より 覚如 13 歳、延暦寺の宰相法印宗澄に天台を学ぶ。

『慕婦繪々詞』

室町時代初期に描かれた『慕婦繪々詞』(1351年)には、当時の僧侶の暮らしぶりが克明に描かれている。『慕婦繪々詞』は浄土真宗の開祖親鸞の曾孫にあたる覚如(1271-1351)の伝記絵巻。西本願寺に伝わる貴重な絵巻だが、大正時代に模写されたものが『慕婦繪々詞』として国立国会図書館デジタルコレクションで公開され、インターネットで誰でも見る事ができるので、絵の

細部までつぶさに確認できる。

絵巻の人物一人一人の仕草や表情の豊かさに思わず見入ってしまう。衣服、食事、住まい、遊び、行事、風俗が描かれ、鎌倉時代末期から南北朝頃の様子をリアルに伺い知ることが出来る。

さて、いけばなの歴史から見ると、最古の花伝書とされる『花王以来の花伝書』が1486年とされるので、それより130年以上前の描写として眺めることができる。(ただし慕婦繪々詞巻1、巻7は足利義満の時代に紛失し、1482年に作り直されているので、制作年代による描写の違いがあるかもしれない)

巻8には京都大原の勝林院が描かれ、本尊の阿弥陀如来の前机に枝を挿した一对の華瓶が見える。(図⑧⑨)



『慕婦繪々詞 巻3』より 奈良興福寺一乗院にて法相を学び 17 歳で出家・受戒ののち行寛に学ぶ。

6



『慕婦繪々詞 卷5』より 歌会を催し打聞（歌を書き留める）をして歌集「閑窓集」をつくる（正和4年）。

今でも阿弥陀如来に供える華瓶には香木としての櫛の枝を挿すが、これはその昔、瓶の中の浄水を清らかに保つ意味で花や香木で器の口に蓋をしたのが起源だそうだ。

巻5の歌会では板の間の奥に3幅の軸が掛けられ、それぞれの前に一對の花瓶と香炉が敷板に置かれている。真ん中の軸は歌聖柿本人麻呂だろう。広口の花瓶に生けられているのは高野槇か。（図⑥⑦）

巻1と巻3には盆石や箱庭が描かれている（図①③④⑤）。

台の上に自然の景色を再現する飾



7

り物は平安時代に「州浜」と呼ばれる貴族の間で流行した。盆石、盆景、盆栽の起源は中国だが、石や植物で神聖な空間を作ろうとする行為は、その後のいけばな誕生に繋がっていると思う。

図②の床の間には塗の台の上に青磁の鉢に紅白の花と細い葉が見える。はたしていけられたものか鉢植か。この巻1は紛失したのち1482年に描き直されている。書き直された頃にはこのような床と床飾りがあったことが想像できる。（つづく）



8

9



『慕婦繪々詞 卷8』より 貞和2年、大原の勝林院五坊を尋ねる。



イチハツ（鳶尾）

イチハツは中国原産のアヤメ科の多年草。日本にいつ頃来たのかはつきりしないが、平安時代の医学書『医心方』に鳶尾・和名古也須久佐の記載がある。『立華時勢粧』ではシヤガの仮葉、カキツバタの仮花として一八を使うと書かれている。葉はシヤガに似ていて、花はカキツバタに似る。

乾燥や暑さ寒さに強いイチハツはかつて茅葺屋根の棟押さえとして植えられた。大風から屋根を守る役目である。イギリスの植物学者ロバート・フオーチュンも『幕末日本探訪記 江戸と北京』（1863年）の「神奈川の宿場風景」の中で「茅葺き屋根の背にほとんど例外なくイチハツが生えていた」と描写している。

フランスのノルマンディー地方や北欧の田舎に残る草葺屋根の家には、日本のイチハツと同じようにジャーマンアイリスが植えられていることがある。洋の東西で同じように屋根に咲くアヤメの仲間。なんとも不思議で面白い。

上御霊神社の鳶尾

昨年の5月5日に上御霊神社へイチハツを見に行った。今、切り花でイチハツと呼ばれているニオイイリスではなく、本来のイチハツの方だ。

上御霊神社は相国寺の北に位置し、古くは鴨川から別れた川が境内を通って御所へ繋がっていて、神社の堀にカキツバタが群生していたそう。神社の近くに尾形光琳の屋敷があつたそうで、その当時この地で燕子花をスケッチしていたかもしれない。

昭和初期に川がなくなり堀の水も干上がったのでカキツバタが消えてしまったのを憂い、20年ほど前に近隣の氏子有志によって乾燥に強いイチ

ハツが植えられ、往時を偲ぶ景色を蘇らせてくださった。

現在のイチハツの景観は、氏子の皆さんによる「いちはつの会」によって植え替えなどの日頃のお世話によって維持されている。

イチハツは古来、厄除け、火除け、

風除けの植物として茅葺き屋根の棟に植えられ、災厄から家を守ってくれと信じられてきた。古の花の文化を伝えること、花を大切に育てることは環境にも人の心にとっても良いことである。このことは花をいける私たちこそ大切にしたい。





ニオイイリスの生花

△9頁の花▽ 仙溪

花型 行型 三花五葉
 花材 ニオイイリス（菖蒲科）
 花器 陶水盤

春の早い内から楽しめるアヤメ科の葉組ものにニオイイリスがある。花屋では（シロバナ）イチハツの名で売られるがイチハツではなく、地中海沿岸原産のジヤーマンアイリスの仲間。古代ギリシャやローマの時代から香水に使われた植物だ。

イリス（アイリス）はギリシャ語の「虹」から付けられた名前。一日も早く災いが去って明るい日が差し、虹が出てくれますように。



上御霊神社のイチハツ



横から見た奥行き

桜の立花

△10頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花 桜一色

花材 啓翁桜（薔薇科）

松（松科）

五葉松（松科）

花器 天女文銅器

やっと立てられた桜一色。撮影して現像された途端に手を加えたくなる。毎日自分の目が更新されているからだろうか。花を生けても生けても先が見えない。

これだけ綺麗に咲いてくれた啓翁桜は、一ヶ月ほど楽しませてくれた。流枝は皮一枚で繋がっていたけど、最後まで保ってくれた。凄まじい生命力である。お気に入りの天女の器に。

横から見た奥行き



連翹の生花

△11頁の花▽ 健一郎

花型 草型 真流し





花材 連翹（木犀科）
花器 狂言文銅薄端

連翹の枝を50本以上の中から選んだ5本。1番初めに選んだ枝はもちろん真である。50本の中から、似たような枝が2本あった。2本とも使うと珍しい枝では無くなってしまうので1本が際立つように枝を選んだ。留が少し高いが、全体で見るとバランスがとれている。連翹の黄色が薄端の銅器によく合う。枝の中は空洞なので心して撓める事。

横から見た奥行き



レモンちゃんと踏の臺





出逢い花（37）

仙溪

みつまた
三桮（沈丁花科）

黒百合（百合科）

花器 志野花入（野中春清作）

人が魂を込めてものを作ると、作ったものに魂が宿る。そんなことを感じる年齢になってきた。中でもやきものは最終的に火によって命が吹き込まれる点で特別だと思う。

この小さな志野花入も何かを持っている。最初に見た時にそう感じたが、実際に花をいけてみてますます好きになった。玄関の掛花にして庭のフキノトウやツバキをいけて楽しんでるが、何気なく挿しただけでも雰囲気のある花になってくれる。

ミツマタは中国原産の落葉低木で和紙の原料となる。柿本人麻呂の歌に「三枝」の名で詠まれているのがミツマタだろうと言われている。三つに分かれた小枝に可愛い花が咲いている。クロユリを出逢わせると、互いの花色が際立った。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
4 月号
No. 694

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ザ・ニホン

△2頁の花▽ 仙溪

花材 啓翁桜（薔薇科）
けいおうそうくら

椿（椿科）
つばき

花器 耳付陶花瓶

日本で器に花を挿す文化が根付きはじめた頃、すでに桜と椿と一緒にいけていたのだろうか。どちらも日本では古より春を教えてくれる木であった。ザ・ニホンと呼ぶに相応しい花木だ。そんなことを考えながらいけると、まさに日本をいけているような、しみじみとした気分になってくる。

しかし、日本文化と呼ばれるものも他国の文化の影響を強く受けている。梅や桃、牡丹や芍薬、菊ですら古く中国から伝わった植物だし、このケイオウザクラも日本と中国の桜を親に持つ品種である。

様々な文化を受け入れ、育み、独自に発展してきたものが日本文化だと考えれば、いけばなが今後どのように変化してゆくのか楽しみになってくる。何を守り、何を変えるか。自分自身に問いながら。





照葉椿
てりはつばき

△3頁の花▽ 仙溪

花型 草型 内副流し

花材 照葉椿(椿科)

花器 煤竹竹筒

テリハツバキの生花を部屋に飾っておいたら、いつのまにか花が咲いていた。葉色も様々な色に変わり、一重の赤い花と絶妙な色合いをつくっている。

いけてから一ヶ月経ち、葉も落ちはじめたものを撮影した。最初に撮った(写真⑤)のと比較すると変化の具合がよく分かる。

このような鮮やかな景色はおそらく自然では見られないだろう。テリハツバキが私に密かに見せてくれた。そんな気がして喜んでいる。



春を迎える花

△表紙の花▽ 櫻子

花材 雪柳(薔薇科)

椿「岩根絞」(椿科)

花器 陶花器

中庭の寒椿が昨年の11月18日にひとつめの花を咲かせた。一昨年より10日ほど遅かったので目付けを記しておいた。花のない時期に咲いてくれる貴重な椿だ。

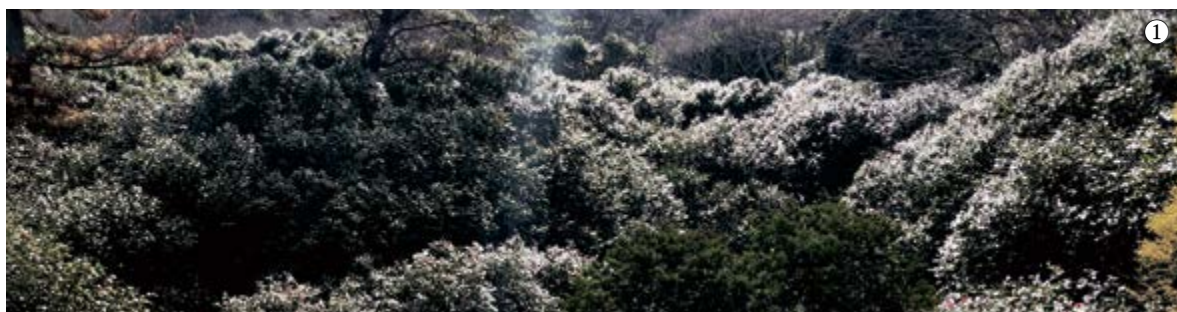
この椿が冬の間に咲いてくれるお陰で、晩秋から春までの長い間、いろんな椿が咲き続けてくれる。

品種によって咲く時期が違うが、咲く順番は毎年変わらないように思う。

椿は浮かし花や掛け花になくてはならない花でもある。いけるのが待ち遠しい。でも庭の椿はあまり切りたくないが。

今年は大輪の「岩根絞」を雪柳と取り合わせる事が出来た。雪柳と椿、桜と椿は大好きな組み合わせだ。

岩根絞りの様な派手なコントラストの花は、軽やかで伸びやかな雪柳がよく似合う。



ツバキ群生林

山口県 萩市 笠山

(2021年3月18日撮影)

ヤブツバキの群生で有名な萩市笠山は約八千八百年前の噴火でできた火山で、冷え固まった溶岩(安山岩)が、陸上では沼澤を支持している。人々はその中から木材や石材、海産物を得ることで文化を育んできた。

ヤブツバキは新や材木として重用され、切り株からは新たな枝が再生し、独特のツバキ群生林が生まれた。

江戸時代には秋城の北東、鬼門の方角にあたるため、毛利藩は笠山一体を立ち入り禁止にし、数百年間自然林になっていたが、明治になって禁止は解かれ、多くの大木は切り倒されたそうだ。

それでも数十種のヤブツバキが五千株、約二万五千本自生している。

群生林の中はツバキだけの世界が広がっていた。全身でツバキを体感できる。

①展望塔に上って群生林を上から見ると、太陽光で葉がキラキラと輝き、幻想的な風景が。

②君むした溶岩と椿の樹林。葉と花が散り積もる。

③大木は切られた後とはいえ、曲がりくねった幹に年輪を感じる。



椿一色の立花

△5頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 椿(椿科)

花器 陶花器(市川博一作)

秋の旅行へ行く1ヶ月ほど前に立派な椿に巡り会えた。

枝ぶりはいけばなで表現する分には格好があまり良くないが、一枝単位で見ると上品である。

厚みのある立花で椿の良さを出せるのか危惧していたが、それなりに良さを出せたのではないかと満足している。

自分が椿の木を見て感じている良さを一枝で見せるのは難しい。今の僕が試みても、一枝では自分の思う椿には見えないだろう。

副が大振りだったので控枝を流枝と請の間から覗かせた。

最近、面白い枝と出会うことを心より楽しんでいる。





六色椿

△6頁の花▽ 健一郎

花材 椿6種(椿科)
花器 陶花瓶(木村盛伸作)

五色椿は紅・白・桃色の3色を基本に、一本の木で様々な変化に富む花が咲く。一枝一枝に見応えがあり、散りゆく姿は色鮮やかで、寂しさを感じさせないようにしているかのよう。

今回出逢えた6種の椿はみな生き生きして見えた。小さな器に溢れんばかりの椿たち。



白花満作(フオザギラ・マヨール)

△7頁の花▽ 健一郎

花材 白花満作(満作科)
椿(椿科)
花器 陶花器(ティム作)

白花満作(フオザギラ・マヨール)は北



アメリカ原産で、4月から5月にかけて花を咲かせ、秋には満作に似た紅葉の葉が綺麗な。初めて生けたが、独特の香りと花がお気に入りである。

ツバキは葉を省略し、蕾も落とした。花と残った葉が目立ち、シロバナマンサクの花が良く映える。

個人的に、オレンジ色の背景が椿とフォザギラ・マヨールの良い出会いの場になったと感じている。

和のテイストを取り入れたティムさんの器がその雰囲気にも馴染み、説得力を与えている。





出逢い花（40）

仙溪

こでまり
小手毬（薔薇科）

しゃくやく
芍薬（牡丹科）

花器 ガラス花瓶

（鈴木玄太作）

小手毬も芍薬も中国伝来の植物。シャクヤクは中国で紀元前にすでに園芸植物としての記録があり、花の觀賞とともに根は漢方薬として利用され続けている。コデマリが中国でどのような歴史を持つのかわからないが、日本には江戸時代初期に伝わって「立花時勢粧」にも記載がある。

シャクヤク1本とコデマリ1本をガラス花瓶に挿してみた。シャクヤクの丸い花にコデマリの丸い花。あえて器にも丸い飾りのあるものを選んだが、互いに響き合う感じが気に入っている。



『嗅覚』

健一郎

と口腔内が乾燥する。

菜月の誕生日に2人で香水を作りに行った。2〜3種類の匂いを調合師さんをお願いして足してもらうのだがこれがなかなか面白い。眼に見えない匂いと匂いの足し算は想像が難しかった。「こつちの香りを強くしたいです。」「もう少し鋭く。」「もつと爽やかに。」「様々な言葉が飛び交う。自分が作りたい匂いが明確でないため、調合してもらうたに好みも目指す匂いも変わる。好きな匂いと好きな匂いを足せば好きな香りになるというわけでもなく、人に伝えづらい感覚を言葉にし、出来上がっていく香水の調合には可視化できない楽しみがそこにあった。

人は息をしている以上、匂いから逃れることはできない。目や耳は塞げばいいが鼻をつまんでの口呼吸はそう長くは出来ないだろう。ダイビングをする時は口呼吸のみだったが、陸で口呼吸をする

人間社会の近代化と匂いは密接な関係だったに違いはない。生活排水や廃棄物の処理方法が再検討された。コンクリートで密室化した部屋を各自で管理することになった。人が感じ取ることができない匂いを減らすことが都市化において大きな課題だっただろう。空調機や消臭剤で町は溢れかえっている。そのおかげで私自身、京都で生活をしていると匂いに対してのストレスが年に一度ほどしかなかったってしまった。五感のうち一番衰えているのだろうと予測している。その一度とは祇園祭の巡行の日である。前日までの夜店や屋台から出た汚れの匂いがアスファルトにこびりつき鼻につく。

夕暮れ時に、一軒家が連なる場所を歩いていると、魚を焼くにおい、お風呂に浸かり水が溢れ出る音が見えずともありありと情景が浮かぶのが面白い。プライバシーがあや

ふやで、近代化以前の日本を思わせるような光景に近い気がする。お隣さんの生活音、臭が感じられるとそばにいた事を思い出させる。心なしか、そういった地域を朝、昼に歩いてみるとよく、賑やかな井戸端会議を見かける。

私自身、過度な無臭化はあまり好みではない。その家、その家の匂いが好きで、匂いも文化であると思っている。きのこ嫌いの私にとつて、星を見にいづくべく飛驒行きの電車に乗った際、乗客が一度に食した加熱式の松茸釜飯弁当の匂いに耐えられなくなったのと、良いことばかりでもないが、心地よい匂い、不快な匂いは人によつて変わる。魚を焼く匂いが海外で受け入れられない話もよく聞く。日本以外の土地へ訪れた際、飛行機を降りて一番初めに接する文化はその土地の匂いである。滞在するとすぐなれるのだが、鼻が慣れるまでが楽しい。

ラフレシアは動物の死臭に擬態しているという説がある。ラフレシアはその匂いで媒介者の蠅などを誘き寄せている。強烈な匂いは、その場にて圧倒的な存在感を出しているのだろう。人は強いニオイを消すことに多くの時間を費やした。そして芳香剤や、香水で自分の思う匂いを纏う。

今回、菜月はNo.309と自身の生誕の日を香水瓶のラベルに貼っていた。彼女は何かを惹きつけるためではなく、自身の好きな匂いを纏（まと）いかけたと言っている。満足そうだ。

今、匂いがない環境は整っている。そこに何の匂いをものせるのか。「あ、金木犀。」「あ、今日は魚や」「もう雨降りそうやな」心地の良い匂い。良く思わない匂い。嗅覚は意識しなければ知覚できないほどまでに無臭化されている。なので感覚が鈍ってしまう。

狩猟時代は匂いを頼りに生活していた。視覚や音だけの情報ではこと足りないからだ。五感の中で特に、退化しつつある嗅覚を意識すると、今生きている世界に與（ま）りつきを感じ取ることができ、面白い。季節、人の体調、時間、場所を匂いで感じたい。人がいなくなったことを確認してマスクを外す時間が好きだ。



フキノトウとレモンちゃん
(2月15日撮影)

エジプトの青いスイレン 仙溪

仏教の経典に出てくる青蓮華^{しょうれんげ}はハスではなく青い熱帯スイレンだ(図①)。古代インドの遺跡にはハスと共にスイレンも浮彫されていた(前号参照)。この青いスイレンにはどんな背景があるのだろうか。



①熱帯睡蓮(エジプトロータス)

出展:「花の王国1 園芸植物」
荒俣宏著/平凡社



沼地での狩猟の様子。左にパピルス(猫)も、足元にスイレンが見える。
出展: ②③④書記官ネブアメンの墓壁画, B.C.1350。⑪予言者ユーザーハットの墓壁画, B.C.1294-1279。(メトロポリタン美術館の複製画) <https://www.flickr.com/photos/menesje/sets/72157608008967297/with/4058204742/>



⑤冥界の神・オシリスの足元から出る白スイレン。パピルスに描かれた「死者の書」(フネフェルのパピルス)の一部。B.C.1275。(大英博物館)
出展: ⑤ https://www.britishmuseum.org/collection/object/Y_EA9901-3



饗宴の図。青いスイレンの香りを嗅ぐ女性。



スイレンのブーケを持つ女性。



ツタンカーメンの棺の花襟。メトロポリタン美術館。出展: <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/684769>

エジプトのスイレン信仰に、生命の根源としての「壺」がインドで加わり、仏教と共に日本へ来ていけばなへと昇華した。そんな大きな流れを想像している。

熱帯スイレンには良い香りのするものが多い。彼らはスイレンを池や沼で栽培し、花から香料を抽出した。青スイレンの香りには鎮静作用があるらしい。花の香りを直接嗅いだり、葬儀の花束(図③)や神殿の捧げもの(図⑩)、女性の花飾り(図⑩)などとして利用した。

人々が集まる部屋にスイレンを生けることもあったのではないだろうか。神秘的な甘い香りが広がるように。

結びつき神聖な花となった(図⑤)。ツタンカーメンの棺に残された花襟(図⑥)には様々な植物が織り込まれていて、スイレンも加えられている。スイレンから生まれる像までも(図⑬)。それらは蘇^{よみがえり}りの祈りの現れだろう。



テーベのレクミラの墓壁画、B.C.1479-1425。クレタ島から来たミノス人使節団。様々な金属器の贈り物を持っている。

出展：⑦ <https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/7215767833466360/with/32544493391/>



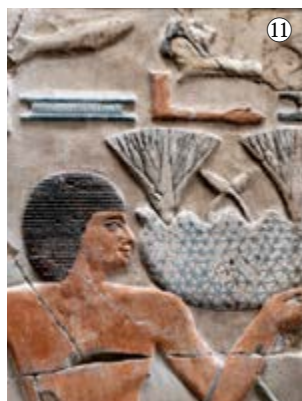
ファイアンス・ボウル。B.C.1550-1458。四角い池の周りにスイレンが描かれている。エジプト・ファイアンスは古代エジプトの鮮やかな青緑色の焼き物。



葦の束形のアラバスター。スイレンを挿すため？
B.C.15th. 高さ 6.5cm。



⑦の部分複製画。スイレンの造花が立てられた器。出展：<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544609>



センウセルト1世のピラミッドより。
供物室のスイレンの鉢。B.C.1961-1917。



スイレンの頭飾り。



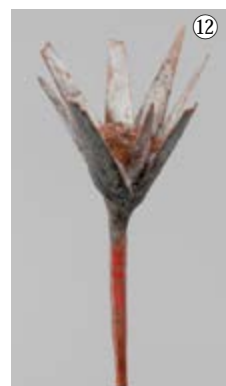
⑮ スイレンから生まれる太陽神の子。象牙。B.C.8th。



⑯ スイレンの神、ネフェルトム。銅。B.C.332-30。



スイレンから出現するツタンカーメン



スイレンの造花。木製。
高さ 8cm. B.C.2051-1981。

出展：⑨⑪⑫⑬⑮⑯ <https://www.metmuseum.org/art/collection/> (メトロポリタン美術館の公開データベース)
⑬ <https://www.flickr.com/photos/manna4u/albums/72157666023968570/page3>



エジプトの器

△12頁の花▽ 仙溪

花材 ミモザ（豆科）

ラナンキュラス（金鳳花科）

花器 銀象嵌真鍮瓶（エジプト製）

古代エジプトでは王の棺をアカシアで作ったそう。アカシアは不死のシンボルとして神聖な木であった。アカシア（Acacia）の名はギリシャ語の「尖らす」に由来するそう。で、アフリカのアカシアには棘のあるものが多い。

アカシアの仲間はおーストラリアにも多く、ギンヨウアカシアやフサアカシアが花材になっている。両親が「花ふたり旅」で使ったエジプトの器に、ギンヨウアカシアをいけた。アフリカのアカシアのように棘は無いが、黄色い花が金銀の器に豪華に映る。エジプトの神々も喜びそう。地中海沿岸原産のラナンキュラスを加えて、古代エジプトの華麗な文化に思いを馳せている。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

4 月号

No. 706

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花の芸術

ART OF FLOWER

立花時勢粧333年

3月2日～7日

大丸ミュージアム〈京都〉



富春軒桑原仙溪が著した花伝書「立花時勢粧」。その中に「木の天然自然に従ってその生まれ持った生きる働きを導く」ことが挿花の極意ととれる箇所がある。そんな気持ちでこの桜の老木を立てた。皆さんが毎日水を入れ替えてくれたお陰で、居心地良さそうに花を咲かせ葉を広げ続けて見事な景色を見せてくれた。幅4m弱の花をやすやすと支える器も凄かった。この器なくしてこの花は成し得ない。手に入れておいてくれた天国の両親に感謝している。 仙溪

桜一色立花 桑原仙溪（十三世家元）

花材／本桜（薔薇科） 卜伴椿（椿科）

花器／白釉彩泥花器 市川廣三



家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回はとても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にikebanaの四方正面の花。陽光桜は天城吉野と寒緋桜の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回ikebanaしたのは3メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア（蘭）が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をikebanaされた事が素晴らしい。

桜の四方正面 桑原 櫻子（副家元）

花材／陽光桜（薔薇科） 河津桜（薔薇科） 雪柳（薔薇科） 板屋名月（楓科） レリア（蘭科）
花器／陶花器 清水六兵衛



庭で育てられているような松でなく、自然に生えている松を特別に頼んだ。立花の型を気にせず、自然にその枝が生き生きとした表情を見せる場に配したら見事な立花になった。初めての経験である。花を生けるとはこういうことかと思った瞬間でもあった。それぞれが味わい深く美しい。崖、深山など様々な場所で見える松の景色を想像させる。松は来場者をどう見ていただろうか。

松一色砂の物 桑原健一郎（次期家元）

花材／松（松科） 松苔木 晒木

花器／銅砂鉢



桑原慶華
アロエ デンドロビウム
器／ガラス花器 エングマン（スウェーデン）



二井慶博（家元補佐）
松 柘植 伊吹 躑躅 杜若 榎木 枇杷 器／銅立花瓶



横田慶重（華老）
唐桃 薔薇 器／陶水盤 宮川香雲



川瀬慶裕（家元補佐）
蛇の目松 洋菊数種
器／染付鉢 中島豊人 中島恭子



武田慶園（華老） 三木慶善（家元補佐）
木瓜 器／陶花器 近藤豊



北川慶法（家元補佐） 山本慶智（家元補佐）
河津桜 牡丹 ミリオクラダス 器／陶花器 竹内眞三郎



米山慶嘉（家元補佐）
枝垂桃 椿 器／陶花器 近藤豊

花の芸術

特別席の15作を掲載します。（会期順）

「花の芸術」
立花時勢粧333年
桑原専慶流いけばな展
3月2日（水）〜7日（月）
大丸ミュージアム〈京都〉
出品者 125人
出品数 96
大作席 3
特別席 15
中作席 39
小作席 39



阪本慶純（家元補佐）
白梅^{がっこうつばき} 月光椿 器／松樹天目大鉢 木村盛康



和田慶千（華老）
シンビジウム カトレア パフィオペディラム
オンシジウム アンスリウム・ジャングルブッシュ
ネオレゲリア^{びかくした} 麋角羊歯の枯葉 器／陶花器 森野泰明



朝倉慶佐（家元補佐） 田代慶澄（総目代）
白梅 松 椿^ひ こて檜葉^{むいらぎなんてん} 柊南天 水仙 器／銅立花瓶



長尾慶淑（家元補佐）
雪柳^{こちゅうらん} 胡蝶蘭 アルストロメリア
器／彩泥陶花器 宮下善爾



桑原菜月
連翹^{れんぎょう} 雪柳 ラナンキュラス 器／鉄足ガラス花器



林慶妙（家元補佐）
木瓜2種^{ぼけ} 薔薇^{ぼら} 器／青磁壺 米沢蘇峰



小菅慶節（家元補佐）
板屋名月^{いたやめいげつ} 石楠花^{しゃくなんげ} 器／莫庵目小判型花籃^{ござめ かて}



桑原慶寅
苔木 エピデンドラム ミリオクラダス
器／陶花器 竹内眞三郎

「花の芸術」

立花時勢粧333年
桑原専慶流いけばな展

コロナ禍での流展でしたが、風通しの良い設えでゆったりした展示にしたため、過去に経験したことがないような花展になりました。

「花を觀賞する」ではなく「花と時を過ごす」ような新鮮な感覚を持たれた方も多かったと思います。

全てのいけばなを横や後ろからも見ることで、向こうにいけられた花との重なりも心とむ景色になっていました。

会場入口では次期家元の力強い松一色砂の物が迎え

花となり、会場内では私と副家元の桜の大作が31席のいけばなを見守ります。
その31席は各期総替えとなって、それぞれの期の景色をつくっていました。

私達の3作は6日間毎日水を入れ替えて展示。副家元の桜は次第に花色を濃くし、私の桜は会場で花が咲き、葉が居心地よさそうに広がっていました。

ご来場下さった皆様に厚く御礼申し上げます。
開催が危ぶまれる中、素晴らしい花材が集まったことに心から感謝しています。

コロナの規制で来られなかった皆様とも、ウェブ上で花展の様子を共有できました。全出品作の写真と花

の名前、器の作者名をご覧いただけます。立花時勢粧のことを知って頂きたい思いで作った解説パネルも公開していますので、いつでも覗いてみて下さい。

皆で花をいけることが何カ世の中のためになることを願い、入場料全額を京都市に寄付させていただきました。他流の先生方にも入場券を買ってご覧いただくこととなりましたが、皆さん快くお越し下さり、また共感のお言葉も多く頂戴しました。いけばな文化が社会を育む方法として、このような花展もあって良いと思います。

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術なのだ、改めて実感しました。



花の芸術 出品者名簿

通期

桑原 仙溪	家元
桑原 櫻子	副家元
桑原 健一郎	次期家元

1期

桑原 慶華	
横田 慶重	華老
米山 慶嘉	家元補佐
北川 慶法	家元補佐
山本 慶智	家元補佐
二井 慶博	家元補佐
関和 慶弘	家元補佐
杉浦 慶弥	家元補佐
小池 花風	会頭
大塚 輝峰	入門
矢野 慶良	総目代
北村 慶美	総目代
藤田 慶綾	総目代
井尻 慶聡	総華監
安達 慶令	総目代
相内 慶啓	目代
釜井 慶経	華監
中山 慶元	目代
小橋 慶智	総華監
和田 慶年	師範
大野 慶友	総華監
佐藤 慶友	総華監
安藤 慶津	華監
植野 慶栄	華監
永田 慶悦	華監
千田 慶真	師範
谷口 慶喜	師範
浅井 慶知	師範
比嘉 慶志	師範
小倉 慶麗	師範
石黒 慶知	師範
外川 慶美	師範
國府谷 慶知	師範
岡田 慶延	師範
酒井 慶康	師範
空華 慶千	師範
田邊 慶花	師範
織田 慶純	師範
小島 溪月	初伝

2期

桑原 慶寅	
武田 慶園	華老
三木 慶善	家元補佐
川瀬 慶裕	家元補佐
長尾 慶淑	家元補佐
小泉 慶哉	目代
朝倉 慶佐	家元補佐
田村 慶澄	総目代
後藤 慶節	総目代
藤本 慶隆	総目代
森本 慶明	総目代
今村 慶悟	総目代
今村 慶明	師範
滝本 慶由	総目代
赤木 慶希	総目代
白崎 慶穂	目代
河野 慶美	目代
奥井 慶和	総華監
松本 慶季	総華監
鹿野 慶正	総華監
佐藤 慶由	総華監
佐藤 慶美	華監
秋山 慶淑	華監
手塚 慶美	師範
内田 慶雅	華監
井上 慶則	華監
高楠 慶幸	華監
山本 慶紀	師範
宮島 慶啓	師範
大丹生 慶愛	華監
上野 慶里	華監
高玉 碧晶	準教授
竹中 慶恒	華監
今井 慶紀	師範
葉柳 慶智	師範
久保 慶彩	師範
石野 慶裕	師範
上妻 慶雅	師範
山田 光楓	入門
クリス 星樹	初伝
早川 久仁子	
平井 さゆり	
鳴木 今日子	

3期

桑原 菜月	
和田 慶千	華老
小菅 慶節	家元補佐
阪本 慶純	家元補佐
林 慶妙	家元補佐
新井 慶珠	総目代
中村 慶典	総目代
足立 慶英	総目代
中西 慶由	目代
井内 慶君	総華監
大江 慶昌	華監
大江 星照	奥伝
大江 翠晶	初伝
古賀 慶和	華監
高橋 慶嘉	華監
稗田 慶智	華監
森 慶汐	師範
服部 慶晴	華監
伊藤 慶和	師範
中居 慶花	師範
東中川 慶智	華監
中岡 慶起	師範
掛水 慶恵	師範
鈴木 慶由	華監
村松 慶真	華監
須崎 慶詠	師範
下村 慶哲	師範
中野 慶里	師範
金子 慶和	師範
権 慶英	師範
木戸 慶由	師範
石原 慶真	師範
上野 慶理	師範
竹内 慶由	師範
小田部 慶綾	師範
奥田 彩波	準教授
岡田 清峰	会頭
大内 竹翠	中伝
水島 輝月	入門
竹林 青波	入門

花の芸術

- ・ 出品作写真
- ・ 花材名
- ・ 解説パネル

をご覧ください



『いけばなつてなんだろう』
健一郎

いけばなつてなんだろう。不思議な文化である。言ってしまうと、切り花を水の張った器に人が入れることをいう。何が人を夢中にさせるのだろうか。

この家に生まれたからだろうか。自分がしたいいけばなと、流祖の意見が合致している。この家でなければ、成人になつてからも生け花をしていなかっただろう。人に伝えるならなおさらである。個人的には流祖の意見を知りより前からこの気持ちは芽生えていたのだから一緒だつたと思つて、師の影響は多大である。家の影響だろう。自分の信条を曲げるつもりはない。その時に思つた正解を間違いだと思つて、貫くつもりである。間違ひに気がついたら修正すればいい。

いけばなについて調べなければ、こりにして調べればよい。今のいけばなと同じとは言われないが通じるところはあるだろう。いけばなは、仏教から起つたと言われているが、仏教発祥のインド、中国やベトナムなどのアジアの国であつても、いけばなに相当する文化は見当たらない。仏教の起つたインドでは植物は心を持たないものとされていたが中国の仏教で芽生え、日本で特に流行した「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしつつかいじょうぶつ）」という草木や国土でさえ皆んなことごとく仏性があるので成仏しますという教えが広まつた。いけばなは花を即身成仏させることなのだろうか。この土壌が他の仏教が布教された国では起こらなかった、いけばなが日

本で始まつた理由の一つではないのかと考えている。学者ではないので正確なことは言えないが自分なりに調べて考えることは楽しい。

私は仏教の影響が大きいことに対して異論はないが、仏教を迎え入れるまでの日本の素地に興味があつた。今日は二つの慣習について触れてみる。水口祭（みなくちまつり）と鳥総立て（とぶさたて）だ。

水口祭は稲作儀礼の一つだ。苗代に初を播く日に水口に土を盛り、季節の花や小枝を挿し、御神酒や焼米などを供え、山の神（田の神と同一視されている説もある）に豊作を祈る祭りだ。季節の草花である山吹や、ツツジなどの枝を畦に挿すという儀礼が残っている。

田の神に花を立てていたとも言えるだろう。依代としての「枝」である。人々は縄文時代に稲作が始まつてからさまざまな形で豊作を祈り続けた。銅鐸稲作が始まり、どれくらい経つてからのことなのだろうか。いけばなが生まれた土壌として充分に考えられる。

農業を覚える以前のその日暮らしの生活から、稲作を覚え多すぎる恵みに戸惑いを覚えたのだろうか。森林や原野を開墾することは、野生の木、そしてそこに宿る神々や精霊は、人間に対して敵意をもつ恐ろしい存在と考えられていたらしい。

鳥総立ては万葉集で詩にも詠まれた神事で、文字で残る最も古い風習らしい。これは長い時間をかけ大切に育まれた木を、造営に使用させて頂くことに感謝するもので、切株に梢を挿してその再生を願う風習だ。もちろん、今

も行われている。砂の物の正真の切り株の後ろからのぞく松にそっくりだ。鳥総立てもいけばなに影響をもたらしているのだろうかと推測する。

林業も効率がよくなるにつれ伐採する量が増えた。多すぎる恵みは戸惑いを覚えさせ、人に神事を創らせたのだろうか。

ご飯を食べることは命をいただき、生きていく事、つまり身体を作ることである。

花を生けることは命をいただき、生きていく事、つまり精神を創ることであらうか。美しいと感じるのは人の心。各個人が花を美しくしているのだ。

人の数だけ美はあるが、共通点が多く、美しいとされるものに傾向はある。それが型と言われるものだろう。だがそれは一見、本質に見えるが全く本質ではない。本質を伝える際に型に変換しなければいけなかっただけである。一本の松をどう型に当てはめるか考えることは間違ひではない。その一本の松をどう生かすかである。

生物（なまもの）は美味しい。魚や野菜の生は格別に贅沢で味わい深く、瑞々しい。

生物（なまもの）とは、生（せい）のあるものである。生きていくものであるということだ。いけばなは他の芸術とは性質が異なるだろう。ドライにされた魚やトマトは味が濃縮されているが、生とは別物である。私個人としては干物も好きだが、やはり生のものは気持ちがいい。

自然のものは、何もしないままが美しいのか？それならばわざわざ切り取らなくてもよい。花を切った瞬間に生の輝きを植物はみせる。鉢から植物を切った時や、大きな木から切った時に感じる。その他大勢から、その一本に焦点が合うからだろうか。まだそれが何なのかは分からない。

お花を側に置きたいという気持ちが人にお花を生けさせたのだろうか。トマトを丸かじりすると美味しいが、輪切りにし、綺麗な皿にのせ、オリーブオイルと塩胡椒、モツツアレランチを添えて食べると違った美味しさを味わうことができる。人の手が加わるということだ。

生けたお花を見て思う。自分は嬉しいが、花は嬉しいのか。みられることに喜びを感じて欲しい。花から直接返事をいただいたことはないが、気持ちよさそうにしているのを見ていてと喜んでるように見える。

生き生きとしているものは美しい。美しく見えるものは洗練されている。シンプルであることは少し違う。数が多くても洗練されていると綺麗に見える。一本も、一つの葉も無駄な物がない事をいう。

そもそも植物の美しさに魅せられる一つの要因に植物の洗練された姿形があげられる。

お花に無駄な部分はない。問題はいつだつて生け手にあるのだ。

美しいいけばなは、花と一体になり、そのものの魅力が引き出されている事をいう。大切なのは、その花、そして

花を慈しみ、対等に在るということである。技術自体は大したことはない。姿勢とその人の在り方が、そのままいけばなとして表れる。

グループホームで働いていてよく感じるが、対等であるということはないのほかに難しいことである。認知症の利用者さんも1人の人間なのですよ、敬いましょうと上司が人に言っていたが、1人の人間として敬おうとしている時点で、全くそう考えていないのは明々白々である。職員に対してと、利用者に対して対等な関係を築いているように見えた人をまだ1人しか見たことがない。皆んな真面目に働いている。誰も利用者さんの事を下に見ているつもりはないのだろうか態度として、言葉の端々に表れている。

花と人が同じ目線に立つことは想像以上に難しいことだ。花の取り合わせ、植物との接し方、枝捌き、水替え、言葉の端々に表れる。

生き物の命（人の時間を含む）を扱う者として肝に銘じておくこととする。

お花を生けるときは個性の尊重を何より大事にしている。最も気を使うところである。それぞれがそれぞれの個性を善い形で発揮できるように。

生きることが誰にでもできる。善く生きることが大切だ。とソクラテスは言つた。お花を花瓶の中に生けることは誰でもできる。グループホームで働くことは誰でもできる。生き生きとした個性を引き出すことが大切なのである。今僕は花に夢中だ。

花伝書を見る

立花 藤除真
「藤の心」一歩子（富春軒・初版）
藤 松 檉 躑躅 柘植
小菊 鳶尾 若葉
（立花時勢粧・下 秘曲の図）



立花時勢粧「藤の真」

S 時に上へ伸びる藤蔓を真にした立花。「秘曲の図」の一つで、元は富春軒の作である。若々しい蔓の姿に藤の命を感じる。2色の躑躅で明るく彩りを増している。

仙溪

一歩子



仙溪が立花で立てた桜の大枝は家元宅の庭に。信楽焼の大壺にいけられた桜とレモンとメイ。
突然あらわれた桜の枝には、猫たちのほかにも時折小鳥がやってきます。



「花の芸術」展特設サイト
花展の様子をご覧ください。
kuwaharaseiken.net
下のQRコード
をスマートフォンで読み込んで
ください。

